

中国の教育改革

——その背景と展望——

大竹鑑



この小論は、拙論文「人間変革の論理」(『哲学論集』一六号、一九六九年)の続きである。そこで中国は文化大革命を遂行することによって、教育の面でまったく新しい試みをおこなっていることを見た。その後の数年間その方向は堅持され、さまざまな改革が実行されている。その具体的な事例をおもに光明日報の記事によって、これはみようとするものである。その前に、一九五八年の大躍進期より、一九六〇年からの三年つづきの自然災害をへて、一九六六年の文化大革命に至る数年間の教育状況を概観したい。これはおそらく現在の教育革命の意義と本質をよりよく理解するたすけとなるであろう。

## 一

一九五八年は、中国において、それまで合作社と呼ばれていた農村の集団化された生産組織が、より広い地域に広がり、集団的所有制の徹底とその一層の発展をみて、人民公社となった年であり、中国の社会主義文化への志向がようやく人民の側からの推進力をもつようになった年でもある。そしてこの動向に応じて、「教育の大躍進」という現象があったのである。この期の教育の特色は、第一次五カ年計画にくみこまれていた文教計画と、その計画をつぎやぶる民衆のエネルギーとの劇的な葛藤である、といわれる。それは「民営学校」の出現と「勤工儉学」精神の主體的実行、そして「全面発達の教育」をめぐるの数年來の論争の結末に、象徴的に表現される。

民営学校の経営は農業集団化の進展と密接に関係がある。役に立つ会計員(経理係)、記工員(労働日の記入と計算をする)を養成し、また民営学校の設立が組合の強化に役立ち、その経費を農業生産協同組合が支出することによって、民営学校発展のテンポを早める、というしくみである。要するに、農村において小学校に入れるものがまだ少

なく、また小学校を卒業してもその九五パーセントが進学できないという状況は、現実の必要にも迫られてもいた農民、そしてすでに政治的、経済的に解放され文化教育を求めていた農民に大きな不満をひきおこし、政府の援助をあたりにしないで自分たちの手で学校をつくりだしていったのである。

しかし、教育行政当局には、教育はおかみがやるものであり、民衆がかってに手をつけるものではないという思想が強くあり（「つけおい思想」という）、また、「量より質の充実をはかる」という方針が一九五三年の末に政務院よりだされてからは、全国的に民営学校の公立学校への吸収、合併がすすみ、新たな民営学校の設立申請にたいしてはさまざまな制限が設けられた。一方多くの民営学校をかかえこんだことによって地方教育財政の負担が増大し、小学校の新設に手がまわらなくて、五年前後には就学率五割台がつづいた。このような状態のもとで、民衆は公的に認められない「ヤミ」の学校をつくりはじめたのである。その形態には三つあった。

(一)「脱靴」学校 公立の四年制小学校を民営にして、その経費を民衆が負担し、それによって浮いた経費で高級小学を設置する。こうして六年制の「完全小学」ができあがる。また、六年制小学を民営にして、その経費で中学をつくるのもあった。（低・中学年をきりはなして民営にするので「靴を脱ぐ」という。）

(二)「載帽子」学校 これは「脱靴」とは逆に、公立の初級小学や完全小学の上に、民営で高級小学や中学を付設するものである。（民営の「帽子をかぶった」学校の意。）

(三)「安領」小学 これは純然たる民営学校に、公立学校から校長や教師が派遣される学校である。（「安領」とは「指導された」の意。）

この三種の型の民営学校は地方によってさまざまの変種を生みつつ全国に広がった。五六年末、民営の「載帽子」

中学は二千校をこえ、五七年五月には三千校を突破した。これは中学校総数の約三分の一にあたる。かくて、五七年三月末の、第三次全国教育行政会議においてはじめて、これらの民営学校に厳格な基準を強いるべきでないこと、各地方の実情にそくして民営学校を援助すべきことを確認し、民営学校を公認したのである。

ところで、「勤工儉学」という重要な方式が民営学校の運営に採用された。それは教育と生産労働を結びつけることで、生産は工場、農場だけでなく学校でもおこなう、すなわち、学生が生産現場で労働するだけでなく、学校工場、学校農場を建設して、きまった時間に労働生産にあたる、というやり方である。一九五八年一月に共産主義青年団中央から、「全学生に勤工儉学をすすめることにかんする決定」が出され、四月にひらかれた第四次教育行政会議でもこの方針は確認されている。

この「勤工儉学」を学校がわからでなく、一般民衆のがわからその考えを具体的に実行したもので注目すべきものに、「農業中学」の創設がある。それは五八年四月、江蘇省に生れ、一年後には全国で一二万校をかぞえた。その特徴はつぎの諸点にある。(一)、半労半学、すなわち、労働半分、学習半分の制度で、全日制でも定時制でもない。普通は月水金学習・火木土労働組と、月水金労働・火木土学習組とに分けるが、毎日半日学習半日労働する形式もある。修業年限は三年ないし四年。(二)、教科は政治、国語、数学、物理の四科目を文化の基本的課程とし、他に技術課程があり、農業機械化、電化、農村工業の課程をふやすことになっている。(三)、教員は共産党支部から政治科教員を、農業技術ステーションやトラクター・ステーションから技術科教員を、地域のインテリのなかから文化教員をそれぞれ委嘱する。(四)、各地域生産と密接に結びつくよう学校形式や課程・教材・学校暦などすべて画一化をさけ、創意を發揮する。(五)、民営すなわち人民公社營であること、などである。普通には「農業中学」とよばれているが、実際には

地域の需要にこたえて、紡織中学、林業中学、水産中学、製鋼中学などがある。この農業中学の発展によって中等教育のたちおくれはいちじるしく改善され、小学卒業生の進学の要求はみたされた、という。（ここまでのところは、斎藤・新島「中国現代教育史」を参照した。）

ここで、農業中学がどのような状況の下に、どのような意図をもって創設され、どのような教育がおこなわれたかの例として、吉林省農安県高家店人民公社太平嶺農業中学の場合をみてみよう。この中学は一九六四年に創設された。当時この生産大隊には県人民委員会運営の県立中学があった。しかし全生産大隊の一九四世帯の貧農・下層中農の家庭には高級中学（日本の高校にあたる）の学生はたった一人で、他方四一世帯の地主・富農の家庭には大学生が二人、高級中学生が三人、という有様であった。年令、授業料、試験、留年などの面から、貧下中農の子女の入学は制限されていたのである。一九六四年、小学校を卒業した三三人の生徒のうち、貧下中農の子女は二八人であったが、一人も中学に入ることができなかった。

また、たまたま中学に進学した生徒のなかには、自分のふるさとへの愛情と貧下中農としての感情がだんだん薄らいでいき、もうふたたびクワを握ろうとしないものがあるのをかれらは見てとっていた。そこで自分たちの思うとおりに運営できる学校を作ろうと決意し、自力更生の精神で、校舎は生産隊によって準備し、机や教学用器材は手づくりでととのえ、腰掛は生徒が家からもってくる、ということ、ここに太平嶺農業中学はできあがったのである。

まず、革命の、自分たちの後継者を育てあげるうえでカギとなる問題は教師を選ぶことだと考え、革命化した教師の隊列をつくりだすために、次の方法がとられた。生産大隊の幹部、民兵の幹部、年輩の貧農、復員軍人および生産大隊で労働鍛練をへた学校出の青年知識分子を選んで教師にあてる。党支部書記は生徒たちに毛主席著作学習に役立

つ話をつねにしてきかせ、政治、思想工作をおこなう。年輩の貧農は自分の家庭の歴史や、自分たちの村とその周辺地区の階級闘争の歴史について語り聞かせ、旧社会の苦しみを思いおこし、新社会の仕合とくらべてみせるなどして階級教育をする。民兵の幹部と復員軍人は軍事についての基礎知識を教え、軍事訓練を指導する。農業技術員と経験の豊かな農民は農業知識、技術を教える。読み書きを担任している学校出の青年知識分子は、授業もすれば労働もし、毎年少なくとも九〇日間集団労働に参加して、自己を改造し鍛練し、革命の継承者を育て上げる任務を果せるよう努める。学校の組織は、生産大隊の党支部書記を校長に選び、民兵大隊長、経験の豊かな農民、革命的教師学生からなる学校委員会を組織した。貧下中農の子女が入学する場合は、この委員会に手続をして許可をとりさえすればよく、年令の制限はなく、入学試験は受けなくてすみ、授業料も払わなくてよいことになっている。

新入生は入学すると同時に「毛沢東著作選」を受けとり、最初の授業科目として、「人民に奉仕する」を学習する。教学は農村における三大革命運動（階級闘争、生産闘争、科学実験）と結びつけておこない、課目もすべてその必要に応じて選ばれる。理論と実際とを結びつけることが提唱され、例えば数学の課目では土地の測量を学んだり、推肥の体積、穀物倉庫の容量の計算などをする。また試験田を設けて、生産隊のために作物の優良品種を育てながら、学生が農業技術を身につけるようにする。労働教育を特に重視し、学校委員会は学生が籠を背負い、道に落ちている牛馬の糞を肥料用として拾いながら徒歩で通学するようにし、一般の学校がいままで実施してきた夏休み冬休みの制度を、春の耕作、夏の除草、秋のとり入れ時の三回に休む農繁休暇制にぎり替え、学生たちが人民公社員と一緒に労働に参加できるようにした。ちなみに、農業中学の学生は一年間に九〇日以上集団労働に参加することになっていて、そうすると自分の労働で得た収入で一年分の食費をまかなうことができる、という。

以上が一つの農業中学のあらましである。農業中学は民営学校の一典型として出現したのであるが、これはどうみても従来の学校教育のカテゴリーに入りにくいし、さりとて社会教育というものでもない。必要にせまられての創設とはいっても、正規の学校に準ずるものをつくろうとしたのにすぎないとするには、あまりにも民衆自身の熱意、創意、エネルギーにみちあふれている。おかみにたよらないで、ある意味ではその意向に逆らって、自分たちの後継者は自分たちの手で、自分たちの仕方での納得のいく考えに従って育てていくという、いわば最も根源的な意味での教育を、いまの日本でいわれる父母の教育権を文字通り行使したものが、民営の学校であり、農業中学である、といえる。ゆえに農業中学はあくまでも過渡期のものであって、いずれは正規の全日制の学校体系のなかにきりかえられていく、といったふうのものでないことをわれわれは読みとることができる。

またこれは、抗日戦争時代に中国共産党中央委員会と毛沢東によって創設された中国抗日赤軍大学、後に改名されて中国人民抗日軍事政治大学という学校とよく似ているのである。抗大の教育は教育と生産労働を結合させ、学習に努めるとともに生産を堅持し、自分たちでほら穴式の住居を掘り、校舎を建て、荒地を開墾して野菜を作り、糸をつむぎ布を織った。こうして革命闘争の理論と実際経験を学び、非プロレタリア思想を改造し、しだいに革命的理想とプロレタリアートの世界観をうち立て、勇敢で確固とした、沈着で人民のために犠牲となるのをおそれない革命的精神をきたえあげた、という。かれらはわずか半年から八カ月の学習をへただけで、ただちに抗日戦争の最前線におもむき対敵闘争に直接参加し、実際の闘争のなかでひきつづき学習し鍛練し、自己を高めた、という。

農業中学が抗大の上記のような伝統をうけついでるとすれば、それは単なる間にあわせの、必要に迫られての拙速主義から生れたものではなく、まったく新しい型の教育のあり方をさし示すものであると予想してよいと思われる。



る。正規の学校体系にたいしてその欠けるものを不足のところを補うといったものではなく、相対立して存在するものなのである。この間の事情をより深く理解するのに、一九五八年を頂点とする数年来の論争の種であった「全面発達」についての考え方の中にみられる対立矛盾を見るのがよいと思う。

全面発達の教育をめぐる討論は、もちろん正規の学校の教育についてのものであった。当時、新生中国の教師の意気込み、社会主義国家建設の次代の後継者を育成するとの使命感と、一方全盤的には良心的であった学生の選ばれたものとしての自負心とが結びつき、それにお手本であったソヴェトの全面発達教育理論に刺激されて、全面発達とは平均発達のことでないと理解され、学生は各教科にすべて五点をとるべきであり、学生はすべて同じように高い成績を取めなければならぬとされた。このため、「強求一律」というスローガンが出され、集団を強調し、生活の面では学生を身動きできないほど規則でしばりつけ、また個人にたいする干渉管理もきびしいものであった。たとえば学校である学科の授業があれば、その学科についてその晩に復習すべきことが規定されていて、実際にしているかどうか確かめるため不意に教師が寮にやってくる、ということもあった。

かくて学生の創造性をそこない、自主精神を養う面で重大な悪影響があること、とりわけ学生の健康状態の不良が顕著になり、そこで「因材施教」ということが全面発達と結びつけて説かれるようになった。個性にそくした教育である。このこと自体、教育方法上からみて問題はないと思われるが、次のような考え方と結びつく問題が生じる。(一)、才能に高低があり、よって教材を区別して教える。(二)、教育手段は人によって異なるべきであり、学生の個性特質を十分に発達させる。(三)、教育目標は人によって定めるべきで、統一を要求することはできない。これらが安直な実用主義への傾斜と個人主義の盲目的な尊重を意味していることは明らかであり、このような思考の底には、社会主義

国になった中国および人民の中には、もはや何らの矛盾、問題は存在せずこれからも出現しない、したがって闘争の必要はないということ、いいかえれば、現実には有利な地歩を占めているものと未だに困難な立場におかれているものとの間の矛盾、差別をそのままに認めていこうという認識があつて、その上でこのような因材施教の考え方ができただのである。

これにたいして厳しい反論が提示されたのは当然である。当時中山大学校長であつた許崇清は、「肉体労働と頭脳労働の対立を消滅させることを含まないような全面発達に関する理解は、マルクス主義の革命的唯物主義の観点から脱離するものであり、人間の全面発達の戦闘的革命的な意味を失なつたものである」と論じた。すなわちさまざまな体制のちがいをこえて、ただ心身の全面発達をはかるといつた抽象的な観点によつて学校教育の任務が考案され、規定されるのではなく、「われわれの学校の基本的任務を考察し規定する出発点は、現在の社会主義革命と建設の任務である」とする。中国の現実においていまなお存在する三大差別（都市と農村、労働者と農民、頭脳労働者と肉体労働者、それぞれの間に存在する差別）を消滅させるために闘う階級のための教育という任務が規定されるのである。

「ブルジョア教育学者たちがいかに『全面』を叫ぼうとも、資本主義的分業は人間の一面的發展へみちびく。人間の全面発達とはその障害をなくすという戦闘性と革命性を豊かにもつた教育任務である。肉体労働と頭脳労働の対立を克服し、若い世代の身体と頭脳とを統一的に発達させ、彼らの身体と頭脳とが全面的に發展できるように保証すること、それを教育の任務とすること、これは搾取をなくし、共産主義の勝利を闘いとるために遂行されている先進的階級（労働者階級）の闘争と連携することによつて解決される」。この言葉は教育の階級性を明示し、教育の戦闘性と革命性を高らかに宣言したものであるが、その具体的な方策としては、学校と政治を結びつけ、理論と実践、教育

と生産労働とを結合すること、「必ず労働と教育を結びつけ、労働（実践）を人間生活の必要たらしめ、教育を普遍的な義務たらしめねばならない」と強調される。ここに、正規の学校の農業中学に代表される半労半学の学校への接近のところが見られる、といつてよい。全面発達についての論争はおもに雑誌「人民教育」誌上でなされたが、その大体の結末は許崇清のこの意見に代表されるのである。（全面発達についての論争は、拙論文「中国において全面発達教育はいかに考えられているか」比較教育試論第一集一九六六年で紹介したことがある）。

そして当時宣伝部長であった陸定一は党中央が召集した教育工作会議の結論にもとづき、また民衆の手になる民営学校が全国にぞくぞくと出現するという教育的現実をうけ、さらに彼自身がいつているように、この数年にわたる全面発達についての論争をふまえて、一九五八年八月に、「教育を生産労働と結びつける」を書いた。それはその後の教育政策の基本方針となるものであった。ここでその論旨を二つの面から考察することにする。一つは、教育を生産労働と結びつけるということについての陸定一の理解と、もう一つは、全面発達教育論の基本的な彼の考え方である。

まず、陸定一は次のような言葉から筆を起す。全国の学校が働きながら学ぶ制度を実施し、このことによつて一般の学校の教育が生産労働と結びつけられるようになり、肉体労働を軽視する長年来的の伝統がうちやぶられ、学校の気風が改まるとともに一般社会の気風にも非常によい影響をおよぼした、と。そして一方、半労半読の民間経営の職業（技術）学校である農業中学の創設、さまざまな業余の文化、技術学校もおびただしい数のものがあらたにつくられたことなどを、「われわれの教育事業は文字どおり百花咲きほこり、万馬空をゆく観を呈している」と称揚する。そして、「人民大衆は社会主義革命と社会主義建設のために教育事業を必要としているのである。人民大衆は革命も建設もやれるのだから、教育をうけることだけでなく教育を運営することもできるはずである」と、少しく歯ぎれの悪

い言い方であるが教育権の重要な内容である人民の人民の手による教育をする権利を認めるにいたっている。これは教育の仕事は専門家がやれるだけで、人民大衆は口を出すかぎりでない、という陸定一いうところのブルジョア教育者の考えが事実によって否定されたことを意味する。

しかしこの人民の教育権も、党の指導に従い専門家の隊伍にたよることによって、正しく行使しうるのであるという歯どめが、すぐそのあとになされている。すなわちいう、「教育の運営は専門の隊伍にたよらねばならず、強大な専門の隊伍がなくてはやっていけない。そして今日でも、幹部を転動させ、師範学校をつくるといった方法でこの専門家の隊伍を大いに強化する必要がある。もちろん教育専門の隊伍は大衆とむすびつかなければならぬし、教育の運営には大衆にたよることが一層大切である。そして共産党の指導のもとに、本職の教育関係者を大衆と結びつけ、大衆のなかから、そして大衆のなかへの大衆路線をとり、全人民をあげて学校をおこす方針をたぬいてこそ、わが国の教育事業はより多く、より早く、よりよく、より経済的に発展できる。また発展できるにちがいない。共産党の指導のもとに全人民をあげて教育をおこす方針をたぬいてこそはじめて全体を統一的に按配しながらそれぞれの分野にたいして手落なく心をくばるとともに、それぞれの分野のあいだの協調をはかって教育を發展させることができるのであり、しかもその教育の發展が生産の發展に害をおよぼさず、生産の發展に役立つようにしてゆくことができるのである」と。

教育専門家の隊伍および党の指導ということがことさらに強調されているが、農業中学をはじめとする民営学校の成立の事情からみると、いささか奇異の感を与えるものであり、その論調は民衆の教育熱をさますものとしか思われない。そしてこの点にもまして注目すべきは、教育を生産労働と結びつけることの意味づけである。

例えば農業中学について、「こうした学校は一方では生徒の上級学校への進学の要求をみたしつつ、他方で農業生産のために技術人材を育てることができし、また設立がわりに容易なうえに目の前の実用にもびったり合ひ、政府の金を使わなくてすむうえに生徒の家庭の経済的な負担も少なくてすむ」。この点は正規の学校の学生の生産労働についてと同じである。すなわち、「社会主義建設は大いに意気こみ、つねに高い目標をめざすことを要求し、勤儉を旨として国をぎざぐことを要求し、技術と文化をも要求し、思想的に赤くて業務に精通したおびただしい数の技術者をより多く、より早く、より良く、より経済的に養成することを要求している。社会主義建設のこうした必要をみたすためにも教育を生産労働とむすびつけることは必要である」。ここでいわれているのは教育を生産労働と結びつけるのは、経済発展のために便宜である、ということにつきる。このような把握の仕方は人間の全面発達への教育についても同じである。

「全面的な発達にはつぎのような根本的な内容がふくまれている。すなわち、学生が比較的広い知識をもち、多方面の仕事ができる人間になり、『社会の必要や各人の好みにおうじてひとつの生産部門からべつ々の生産部門に順々にうつる』（エンゲルス）ことができるようにすることである」。すなわち、労働者が工業生産の分野で多方面の仕事ができ、農民が農業生産の分野で多方面の仕事ができる人間になる、労働者が農民を兼ね、農民が労働者を兼ね、公民が兵役に服し、軍人が退役してまた生産者になり、幹部が労働に参加し、生産者が管理に参加することである。そしてこのような人間であれば、「社会にある必要が生じたさいは、国家として生産の合理的な調整ができて社会にひびかさないますことができます」、という。さらに毛沢東の「われわれの教育方針は教育をうける者が徳育、知育、体育の各方面ともに発達させて、社会主義的な自覚をもった教養のある勤労者になるようにそだてることである」と

い言葉をひいて、社会主義的な自覚をもった教養のある勤労者とは、政治もわかれば教養もあり、頭脳労働も肉体労働もできる人のことであり、これがつまり全面的に発達した人間、思想的に赤く、業務に精通した人間、労働者化した知識人、知識人化した労働者である、とする。

これは毛沢東の言葉をきわめて皮相に理解したもの、あるいは故意に歪めて解釈したものといわざるをえない。陸定一のこのような考えの底にあるのは、社会と人間についての次のような認識である。すなわち、現在の中国において社会主義革命は、経済戦線では基本的に勝利をおさめ、政治戦線と思想戦線では決定的な勝利をおさめている。そして「わが国は工農業生産の大躍進によって共産主義社会（おのおのがその能力に応じて働くとともに、必要に応じて取る社会、都市と農村の差別をなくした社会、頭脳労働と肉体労働の差別をなくした社会——陸定一いう）の実現も非常に近い将来のことではなくなった」という。それで現在の任務は労働大衆を知識人にすると同時に、知識人を勤労者にすること、労働大衆と知識人の双方がそれぞれ自分の不足している面をのばしてこそ、はじめて旧い社会がのこしていった不合理な状態を徹底的にあらため、両方面の立ちおくれた現象をなくしていくことができる、というわけである。現在の社会主義体制は確固不動のものであり、逆もどりすることは絶対になく、また、何の苦勞もなしに、あまり努力もしないでごく自然に共産主義社会に移行していくかのような口ぶりであることがわかる。

もっとも次のようにもいう、「現在わが国の過渡期にあっては、まだ階級闘争がある。将来階級がなくなると階級闘争はなくなるが、しかしそれでもまだ人民内部の矛盾というものがあるので、一万年たってもやはり毒草はありうることになる」と。ところがこの場合、人民内部の矛盾というのは、「真理と誤謬のあいだの闘争、すんだものとおくれたものとのあいだの闘争、生産力の発展にたいする促進派と促進派のあいだの闘争など」を指していつている

のである。これらの言葉からわれわれは次のことを読みとることができる。一つは、社会観にしても人間観にしても、正しいものと正しくないもの、進んでいるものと後れているもの、この両者が固定的に捉えられていることである。正しいものはあくまでも正しい、後れている面のある人は進んでいる人に学びその水準にまで到達しなければならぬ、ということである。これらは矛盾というよりは、単なる程度の差にすぎない問題としてよい。これは毛沢東の次の言葉と比較すればその違いが歴然としていことがわかる。「对立物の統一の法則が宇宙の根本法則であると、マルクス主義哲学は考える。自然界であろうと、人類社会であろうと、人間の思想であろうと、すべてのもののなかにこの法則は存在している。对立物の矛盾し合う側面は、闘争しつつ統一し、これによって事物の運動と変化をうながす。矛盾は普遍的に存在するもので、ただ事物の性質のちがいによって、その矛盾の性質がちがっているにすぎない。どのような具体的事物においても、对立物の統一は、条件的、一時的、過渡的であり、したがって相対的であるが、对立物の闘争は絶対的である」(「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」)。

この毛沢東の言葉は陸定一の文章の一年余り前のものであるが、社会主義社会になった中国にも、またそこに生きる人びとのなかにも、なかんづく進んでいる人間にも後れている人間にも矛盾は起り、進んでいる人が立おくれずまい、後れていた人がかえって進歩してしまうといったことが普段に生起すること、ゆえにその矛盾にたいして断固とした決意と態度をもって立向わねばならないことを指摘している。これは、「……頭脳労働と肉体労働をひきはなす方針は、社会主義の経済的土台に適応せず、人民の要求に合ないので、数千年の伝統はもっていても、おそかれ早かれいつかは人民に見すてられるであろう」という認識、頭脳労働と肉体労働との間の矛盾をそんなに無理をして、努力して解決しようとすることもない、といった人びとの闘争性革命性のきっさきを鈍らせようとしているとしか思

えない考え、と鋭い対照をなしているのは明らかである。

そして、反対し闘争の対象として陸定一がいつも引合に出すが、既成のブルジョアジーの教育方針、教育方法であるということも、人びとの考え方を平板にし、形式的にすると同時に、自分自身を変革闘争の対象とすることを免れさせている。このことと関連して、もう一つ指摘できることは、「教育の目的は学生に比較的完全な知識をえさせることであつて、一面的な不完全な知識をえさせることではない。したがつて、教師の方でも比較的完全な知識をもつようにしなければならないのである」という言葉に窺われるように、現在すでに有利な立場にあるもの、先進と認められているものには、もはや問題とすべきことはなく、また問題が生ずることはない、という認識の上に、その地位あるいは権利を擁護し安定させようとする意図である。

陸定一の根本的な考え方は大体以上のものであると思われるが、それが現実の教育政策の上に現われたのが民営学校の段階的消滅、正規の学校体系への組入れへの意図である。「教育を普及させるためのこうした学校は半労半読のものであり、また業余のものであるから、経費も全部あるいは大部分を自分たちでまかなえるし、『能力のあるものを師とする』原則によって教師もその土地でみつけだせる。そしてそのちに政府の援助のもとに、学課、設備、教師などの完備した学校にだんだん発展させてゆくのである」。この考えは二年後の一九六〇年四月の第二期全国人民代表大会第二回会議での陸定一の発言「教学は改革しなければならない」のなかでより明らかに打ちだされている。「いまの『二部制』の学校をしないで回数をつけて全日制のものにし、ついで寄宿制の学校にしなければならないが、それには建設をおこなう必要がある。また、「教師の水準を高めなければならない。それには師範教育に相応の改革をほどこし、現在すでに教師となつているものの補習を組織することに注意をむける必要がある」との発言もある。



民営学校は臨時のもの弥縫的なものであり、正式の学校とは認められないとしていたのであり、いまはやむをえず一種の複線型の学校体系ですすむが、条件がととのえば正規の学校体系に復するというわけである。事実上これは二種類の学校の差別を公然と認め、したがって農業中学よりさらに上の正規の学校への進学を不能にしているものとしてよい。民営学校のもつ意味を正しく把握しようという気持はまったく見られない。

そして六〇年の大会での発言のなかで、教学の改革をおこなわねばならないとして、「全日制の中等教育、初等教育にあっては、適度に修業年限をちぢめ、適度に程度を高め、適度に授業時間をコントロールし、適度に労働をふやしてゆきたい」、という。いわゆる教学の質量を高めるといふ提言である。そしてその実験例をいくつか挙げてみる。幼稚園では文字と算術を教えることは現行の制度では禁じているが、一三の省、市での試みでは、幼稚園の年かざの子どもが漢字のラテン語つづりをおぼえ、あるいは漢字を八〇字から百字までおぼえたとか、ある小学校の五年生のクラスで算術と代数をまじえて教える実験をおこない良好な成績を収めた、これでいくと中学校で使っている一部の教材を小学校へおろすことができる、とかいったものである。さらに、「全日制の中学校、小学校でのもっとも主要な課程は語文（中国語と外国語をふくむ）と数学であり、これは生徒がせひとも身につけなければならぬ最も基本的な工具である。語文と数学をよく学んでおけば、物理、化学、生物、歴史、地理なども比較的容易に学べる」という提言もある。この言葉は、おそらく農業中学その他の民営学校の死命を制するものといえる。中国の古典を読んだり、外国語をスラスラ話したり書いたり、程度の高い数学問題を解いたりする、いわゆる語文と数学に農業中学の学生はもっとも弱いであろうからである。かくて、六〇年から三年つづぎの自然災害に中国は見舞われることになり、民営学校も大きな打撃をこうむることになるのである。

五八年に教育の大躍進とよばれ、新しい型の学校が誕生し定着し、それがどのように発展するかと期待されていたのが、当時教育面の指導的地位にいた人たちによって巧妙にその精神実質がねじまげられてしまったことを見た。そして六六年の文化大革命を迎えるのであるが、それでは正規の学校では何ら問題はなかったかという決してそうではない。一九六五年末から翌年にかけて光明日報紙上でなされた討論を通じてそれを考察することにした。一つは主に教師を対象としたもので、「啓発式の教学法の精神実質をどのように掌握すべきか」という論題、もう一つは生の学習態度についてで、「どのようにすれば生動活発に主動的（自発的）に学習をすすめることができるか」というものである。のちにはこの二つを一緒にして「教師の主導作用と学生の主動性を正しく結びつけよう」という題目になった。光明日報に掲載されたのは全部で一五〇篇ほどであったが、投稿数はもっと多かつたようである。この紙上討論によって結論めいたものがついたわけではない。文化大革命がはじまる前に掲載されなくなり、結論は文化大革命後にもちこされたわけであるが、単なる教育方法の改善によっては解決しえない事柄であったので、それも当然であった。ここでは、文化大革命直前の正規の学校、とくに中学以上の学校での教学の実情やどんなことが問題になっていたかを、討論を通じてみていきたいと思う。

論題からも察せられるように、教師の教授方法について、「注入式」をやめ、「啓発式」をとるべきであることが大きく問題になっていた。「注入式」とは一時限の授業時間がすべて教師に独占され、「先生は講じ、学生は聞く」ということで、教師は学生にむかって知識を文字通り灌輸する。これはまた「満堂灌」とも表現される。中国の正規の学校ではこの注入式の教授法が普通にとられていたわけであるが、とくに上級の学校にいくにたがってその傾向が強くなるようであった。これは一つには、中国の封建社会以来の伝統的な「師道尊嚴」の思想に由来する。「師は、長

なり」とか、「天地君親師」と並列されたり、「師生は父子のごとし」とされて、師の地位は封建社会にあっては、はなはだ尊厳で専制的なものであった。このような思想が教師の頭に今なお残っていて、知識教育の重視がそれに加わって、先生はすべての面で学生より優れており、その話しは金口玉言でだれも違抗することはできない、と信じている。学生の方も先生に服従すること、まるで天経地義のように思っている。さらに、「学生が知識を学習するのは、必ず教師の伝授を通じなければならず、教師が多く教えれば学生は多く知り、少なく講ずれば少なく知り、講じなければ知らない」（『光明日報』一九六五・九・一一、以下日付のみ記す）と教師は普通に考えていた、という。

また、「教育関係者の生活を保証し、教師の補習を組織してかれらが仕事をうけてもてるようにし、転勤などのことがおこっても賃金をさげるようなことはせず、そのうえ政府の規定にしたがってしだいに集団的福祉をふやし、また適時に教師を昇級させるとともに、勤務年限におうじて手当を支給する方法を定めるようにしなければならない。老年のために働けなくなった教育関係者には集団的福祉をうけて、晩年を楽しくすごせるようにしなければならない。教師の仕事は複雑な頭脳労働であり苦勞の多い仕事であって、当然尊敬されて然るべきである」（「教学は改革しなければならない」という陸定一の言葉は、文脈上すこしニュアンスは異なるが教師にたいするこのような無条件的な規定のしかたは、上の意見と軌を一にするものであると同時に、おそらくその傾向をさらに助長したことであろう。

教師は講壇の上に立ち、書物を操り、傍証博引し、滔々と弁じたて止まることを知らない。例えば文学概論など、「その内容は古へに厚く今に薄く、西洋を重んじて中国を軽んじ、多く貧り全きを求め、煩瑣でごたごた入り乱れる傾向がある。そして教材だけでは用をなさないので教師は別に講義の原稿を書き、学生はそれをノートする」（一九六五・九・一五）。そしてたいいて一つの単元の終りに講評をおこなう。総括をするわけである。講評のときには事例を

羅列し、表揚し、批評する。しかし最も主要なことは自分が準備してきた知識内容をそそぎこむことである。これらの知識は多く書物よりくるもので、少なからず「できあい」のものをまぜあわせたもの（炒現成飯）である。その上一つが終るとすぐに新しい課に入り、学生は咀嚼するひまもない、という。そこで学生はといえば、「このように津々吟味されたものを聞く。しかし自分が書物に向ってもなすすべを知らない。書物はこのように『玄』であり、教師の学問はこのように『博』である。学生のすることといったらそれらの暗記あるのみ、その頭はまったくノートをとることで安心してゐる。かくて学生は書物の『奴隸』に、また教師の『奴隸』になつてしまふ。知識を運用するもの杓子定木で、思考も教師に枠づけられた知識領域のうちに限られ、それ以上に発展できない」（一九六五・一二・八）、という状態である。

ここに「師権」が確立する。教師は学生を完全に自分のコントロールの下におき、意のままに学生を教訓し、服従を強制する。規矩矩の学生を喜び「乱発乱動」するものは、ろくに事情を調べもしないで批判叱責する。教室では学生に問題をだして、自分の思うように「正しく」答えると喜びを色に形わし、間違えば不愉快そうな様子をする。このように教師は多くの枠をはめるのであるが、それを打破しようとする学生はやはりいる。「難題を出したり、あれやこれやひつつこくたずねたり、あるときには教師に頭をかかえさせ、支離滅裂にさせるような問をすることもある。ここで『師権』はその作用を発揮する。『この問題は君が研究する範囲をこえている』、『この問題はこうなんだからこうなんだ』というぐあい。かくて学生は疑いがあつてもそれを質さなくなる。問いがあつてもあえて問わない。求知の欲望もこれにしたがつて消退する」（一九六五・一二・八）というわけである。復習は非常に重要視されたが、予習はその大切さをほとんどいわれなかった、という事実からも上記のことからの一端は窺えると思う。

啓発式の教学方法はこのような事情のもとに強く提言されはじめたのである。注入式の講義の反動もあって、授業中に学生の頭をいきいきと活動させるには、問を發して答えさせるにしくはないと、はじめ、教師は講義解説をまったくやめ、「問題を次から次へと連發爆竹のように出し、学生は応接に大わらわ」(一九六五・一二・二二)という現象もあった。問を提示することが啓発式であると思ひ、「満堂灌」から、「満堂問」になり、「学生は教師の多くの問題に答えるとき、ろくに考えもしないで、『君が一言、彼も一言』というぐあい、誰が何をいつているのか、はっきり聞きもしないし、誰が真に理解しているのかも知ろうとしない」(一九六五・九・八)ありさまである。ある教師は述懐している、「はじめわたしは啓発式教學をやろうと熱をあげ、準備のとき精心に考え、思考問題を提出し教室で学生を啓発して、思考させることによって書中の思想内容と文章の書き方を理解させようとした。ところが結果は事と志とが違つてしまつた。提出する問題にたいして、学生は沈黙して語らず、答えても見当はずれであつた。学生の思維を啓発するどころか、かえつてその心の扉を閉ざしてしまつた」(一九六五・九・一五)、と。

その具体的な内容については知りえないが、このようなことは現場にたつ教師はよく經驗することである。授業において發問ほどむづかしいものはない。發問のよしあしが授業の成功失敗の大半を決定するといわれるほどである。日本のばあい次のような例が紹介されている。小学校五年、國語の授業、教材は「アフリカの光明」である。「シュバイツァーはどんな人だつたか」、「そういつた人になるためにはかげの力があつたか、本人の力か」、「子どもの時はどうだつたか」、「かれの考え方のもとは何であるか」、「その次の現われ方は、どんな現われ方か」、「かんたんに、スーとうまくいくものか」、「この決意はどのようにして生れたものか」、「悩みやいろんなことはないか」、「この決意の固さはどんなところでわかるのか」、「いちばんもとになるのは、少年時代の考え方や生れつき持っている人がらだ

ということになるのだな。外からは「いったものはないか」。このような発問が次から次へたみかけられている。しかも発問の意味するところがよくわからない。とくに傍線をつけたところはどんなことを答えさせようとしているのか理解に苦しむ。結局、子どもが十分に考える余裕がない。小刻みで散漫であるため、子どもの頭が混乱する。発問が多すぎるので、子どもが落ち着かない。いつも発問があつてから考えるという受身の立場になる。不必要な発問も多く混っている、というわけである（氷上正「わたしの学校づくり」四七頁以下）。

また当時の中国の教科内容は盛沢山で、しかも水準は相当に高かつたことも考慮しなければならない。例えば一九六五年度の初級中学の「動物学」の教科書は、「日本の中学教科書と較べてみると、その構成のちがいは別としても、確かに内容の程度は高いと感じられる。あるいは高等学校の程度以上と思われる点もある（解剖図の細かい説明など）」。はたして中学程度の生徒にこの教科書のすべてがどの程度に理解されるか多少の疑問を持たざるを得ない、といわれる。同じく初級中学の「植物学」の教科書について、「全体的に形態、分類が多く、ことに分類が全頁数の約四分の一を占めている。形態、分類の面からみると、日本の中学教科書に比してかなりくわしく、程度が高いと思われる」と評されている（「中国の教科書」上下、中国研究月報一九六五年、三、四月号）。ほかの理科系の教科書もおしなべて同様であり、文科系については前に述べたとおりである。それを問答式で理解させることは、はなはだ困難であろうし、何よりも時間がかかるであろう。ここから、講義（「講授」という）という方法をもう一度見直そうとする意見と、啓発式に疑問をもつものがでてくる。前者は、啓発式の講義解説（「講解」という）を考えようとし、後者には、啓発式の真の意味をより徹底して捉えようとする主張が対置される。

まず講授について。それは教学過程の一つの部分にすぎず、しかもわりあい効果のある教学方法であり、それと討

論あるいは実習と結びつけ、学生の実際の水準より出発し、講評するときには、いきいきとした具体的な言葉を用いて学生の注意を引き、意図するところに学生が思維するように導く、これが啓発式の講授である、という。当時、光明日報も編者提言として、「講授の地位と作用を一面的に否定して、いわゆる『満堂灌』一変して『満堂転』になるのを防止しなければならない」という意見を述べている。先生方の慌てぶりが目に浮ぶようであるが、注入式の講義のすさまじさも垣間見える思いがする。

ある師範学院の学生の次のような報告を、啓発式の講解の一つのサンプルとして紹介しておく(一九六五・一二・二)。それは容国団と孫梅英作の一三〇〇字余りの文章「一張決賽名单」の授業である。この授業は二時間で終わったが、同級生の評判はよく、「前はねむくて聞きもしなかったが、こんどの授業は精神を集中した」という。すなわち、先生の講解は磁石が鉄を吸いつけるようにみんなを吸いよせ、積極的に思惟し考えることを促した。先生は授業の大部分の時間を占有していたけれども、満堂灌であったとは決していえない。どうして、先生の講解にこのような効果が生じたのか。その理由は大体三つである。(一)、先生は文章にたいして透徹した分析を加え、われわれが思いもおよばなかった新鮮な問題を提出した。それで精神を集中して考えざるをえず、また自分のと先生の考えとをつきあわせざるをえなかった。こうして新しい知識を接受し、思路をひろげることができた。(二)、文章中のこまかい、そして同級生がたやすくは発見できない微妙なところを、先生はくわしく講解せずにはわれわれに提出し、考えさせた。例えば、文章中の「領導和運動員們同我們一道反復地、周密地考慮」の、「和」と「同」の用法を考えてごらんさい、この語は党のどういう路線を体現していますか、と発問した。(三)、先生は講解するとき、言葉はいきいきと具体的であり、われわれの気分を引きたてた。

啓発式の教学方法を用いるには、学生の実際状態をよく調査分析すべきである、とするのが啓発式のもつ意味の理解を深めようとする人びとの主張である。教師が問題を出し、学生に考えさせようとすれば、考える手がかりを学生の中に教師は見つけ出さなければならぬからである。もし、満堂問、あるいは問題の大小、軽重を考慮しない多すぎる発問は、啓発の目的を達しないだけでなく、学生に厭気をおこさせるだけである、という。「学生が正確な知識を獲得するのは、正誤対比、正反対比、互相比較、論理的分析などの方法を用いて、教師が矛盾を提出し、それを分析し解決することによってである。そして板書、板画、直観教具を運用して、学生が思考するように導く」（一九六五・九・八）というわけである。ここにようやくにして、教学方法と認識論とが関係づけられたわけである。

すなわち、実践、認識、再認識、再実践という認識の総規律は、教學過程と符合するのかもしれないのか。それは当然一致する、としてある試みをした工業学院がある。それは次のようなものである。「認識過程の段階よりみれば、教學実践は二つに分られる。一つは、感性認識のための基礎的な実践である。半年間で三つの方式を試みた。(1)、直接、生産と科学実験の現場にいき、現場観察を行ない、教学に必要な感性認識を豊富に獲得した。(2)、実験室で実物演示をした。(3)、教具模型を用いて物理現象を演示した。以上の方式は、学生に必要な感性知識を得させるものである。もう一つは理性認識の指導のもとに行なわれる再実践に相当する。(1)、生産と科学実験に直接参加する（これはまだ実現せず）。(2)、学生が将来の工作で使用する電工設備でくわすであろう実際の問題を対象にして加工の簡化を行ない、実験装置を制作した。(3)、理論を使って、実際の問題を解決する設計や計算をやった。(4)、理論を検証する実験を行なった」（一九六五・一〇・一三）。これは感性認識を目で観察してえられる知識にとどめている点や、生産の現場に直接参加していない点など、唯物論的認識からはほど遠いが、このような例が報告されていること自体、現在の



動向と考えあわせて興味深い。

さて最後にとりあげたいのは、啓発式の教学方法を採用することは、単なる教育方法論上の問題ではなく、教師の思想を改造すること、師生関係を改善することと結びつけられ、「師権」を打破するもつとも有効な方法として論じられた点である。それは教育における大衆路線であり、学生自身に問題解決をする能力があるのを教師が認め信じて、同時に学生自身の主観能动性を何よりも重要だとすること、であり、ひいては教育における教師の役割についての冷徹な洞察へと導くものであった。

ある教師はいう、「はじめ、われわれは啓発式に疑いをもっていた。とくに『啓すれど発せず、調(さそう)すれど動かず』の現象にぶつかったときには、学生はやはり年若く幼稚で、知識は貧しく、こちらが講じあちらが聞いて知識が増し豊富になって、よく独立に思考でき、自然に豁然と貫通し、心明眼亮になる。いまはまだその時期ではない、と考えた。しかし教学改革中に多くの生きた事例がわれわれに教えて、学生の能力を低くみなす保守思想を転じて、問題は、学生が積極性、主動性をもっていない、ということにあるのではなく、先生が学生を信じるか否か、敢然と手を放して学生に主動的に学ばせるかどうかにある、とはじめて認識した」(一九六五・九・二二)、と。

「相信学生」(学生を信じる)、このことが中国の教師にとっていかに努力を要することか、それはわれわれの想像の外である。しかしこのようなことは中国の歴史上皆無であったのではない、と唐代の韓愈の言葉を、ある人は引いている(一九六六・一・一二)。「貴なく賤なく、長なく小なし、道の存する所、師の存する所なり」、「弟子必ずしも師に如かざるなく、師必ずしも弟子より賢ならず、道を聞くこと先後あり、術業専攻あり、かくの如きのみ」(「師説」)。つづいて毛沢東の言葉、「われわれは一面教え、一面学び、一面先生になり、一面学生になりうるだけである。よい

先生にならうとすれば、まずよい学生になるべきである。多くのことをただ書物の上で学ぶだけではいけない。生産者、労働者、貧農下層中農に学び、学校では学生に学び、自己の教育の対象に学ぶべきである」、によって師生関係の革命を訴える。学習というものは自己の主動的な研鑽なくしては、一も得るところがないことの認識からである。さらに、孔子、孟子、荀子、王陽明などの言葉が引用される。例えば、「論語、述而」の「不憤不啓、不排不発」。頑固な保守主義の教師の耳に、すこしでも入りやすきを願う心からか。もちろん毛沢東はもちだされる。そして次のような重要な結論に到達する。「教育工作上、内因は決定的なものであり、外因は補助的なものである。外因は内因を通じて作用する。すべての發展は内因が根拠であり、主導であり、外因は条件にすぎず、促進と助力作用を起しうるにすぎない。ゆえに教学工作中、必ず学生の創造性、主動性、積極性を發揮させ、学習上主動的地位におき、教師はただ促進作用と助力作用を起すだけで、決して主導作用を起してはならない」。これはつまり、「教師が学校を治める」、「教育のことは教師が請け負う」といった思想に反対したのであって、教師の指導力を軽く見たり、学生にたいする適切な促進作用や助力作用をおこすのは、いかに大きな努力が必要かということを否定したのではない、と思われる。そのことにふれていないのは、学生に真に自覺的能動性を發揮させ創造力を發揚させたりする教育をまだ実践していないからであろう。事態はその段階にまで進んでいないのである。

はたして、はなはだ低次元の反論が、そうするのがあたりまえのように出されてきた。それは北京師範大学教育系のある教師からであった（一九六六・一・三一）。「社会主義制度は、人と人との間の不合理な関係を改変し、師生関係もそれにしたがって逐次変化が起った。わが国では、とくに一九五八年の教育大革命をへて、新しい民主平等の師生関係はすでに建立しはじめている」という認識に彼は立つ。その民主平等の師生関係とは、「政治原則と科学真理の

前で、教師と学生は平等の地位に在ること」だということかといえ、教学工作にあたって、「党の指導にしたがい、教師の主導作用を充分に發揮すれば、学生の積極性、創造性は發揮され、教学相長が實現される」のである。この場合、教師の主導的地位は人の主観願望によって決めるのではなく、教学の客観規律によって決定されるのである。すなわち教師は学生にくらべて、「道」を聞くのが先である。学生が学校に入るの学を「求め」にあり、知識を学び、技術を学び、労働を学び、思想を学びにである。それは主に教師によって伝授される。学生の良好な学習習慣の養成、学習方法の訓練、知識の掌握と運用もやはり教師の正しい指導と切っても切り離せない、という。党の指導に従うといい、万人に適用しうる出来合の權威あるものがあつて、それを教え学ぶのが教育である、どこまでも權威主義をふりまわしている。そして当然次のような結論になる。「師生間に、民主平等な關係が確立することができるかどうかは、その責任はおもに教師にある。……民主平等な師生關係を樹立することによって、学生の学習の自覚性は高くなり、目的は明確になり、学習はさらにまじめになるだろう」。なんのことはない、これでは視点がまったくさかさまである、教師の責任がそれほど重大なものであることを強調したもの、と一歩ゆずって考えられなくもないけれども、次に学生側の問題に移る。

学生はなにゆえに生き生きと活発に主動的（自発的）に学習できないでいるか。学習負担の過重がまずあげられる。科目数が多く、各科の講義内容もまた多い。しかも試験がひんばんにおこなわれ（不意打の試験もよくある）、成績が悪いと容赦なく落第、退学させられる。一方では、各課に五点をとること、「全優」であることが鼓勵される。いわゆるテスト主義教育である。かくて学生は授業中速記者になる。休みの一〇分間に同級生とノートを補い、自習時間間にそれを暗記する。ある高級中学では全クラスの学生の成績を表にしてはりだし、学習をあげました、という。あ

る学生は、高い平均点をとるために、数理化に全力をそそぎ、語文、史地は失点も少ないので、ちょっと努力すればよい、とし……その結果期末試験は平均九六・四点であり、同級生はこれを「創挙」といい、校長は校会で、「学校の多年の成績最高点を打ち破った」と表揚。「数理化について、各章の復習問題、巻末の復習問題はすべてやり、多くの参考書のをも解いた。三角・代数は章ごとに練習問題は平均して二〇題、一題にはまた四つの小題が含まれている。高中の教科書はもとと内容が多く、毎日完成すべき作業がある。そのあとどこに余分の時間などあるうか」（一九六五・一〇・三〇）、とその学生は訴えている。またある学生は作文で五点をとる秘決を公開するといつて、体験を語り、そして「このような作文は文字の遊戯、詞藻の堆積にすぎない。作文の題も観察したことの感想や読後感あるいは『一つの良いこと』といったものである。……現在の点数は決してわれわれの学習の状況を真に反映しているものではない」（一九六五・一〇・一六）ときめつけている。

さらに、大学一、二年のとき無機、有機化学ではすべて五点をとった学生が、製紙工場にいったとき、ある加工工程で一種の無機化学反応を観察したが、その反応方程式がかけなくて、成績は五点であったが実際は二点にすぎないことをさとした、とその束手無策ぶりを告白している。そしてまた、政治品行を考査するときでも、筆記試験を用いて、品德の上で重大なあやまりがなければ五点をつけ、学生に政治品德では五点をとるのは容易であると感じさせて、「全優」をかちとることに努めさせる、という（一九六五・一二・一一）。また理科の実験などは説明書にちゃんとやり方がかいてあって、(1)、原理を理解せず、準備をしない人でもできる。(2)、もともと理解できない原理は、実験をやってもいぜんとして理解できない。(3)、このような実験は興味をわかさず、創造性を養わない（一九六五・一〇・二三）。という指摘もある。

学生の具体的な日常生活を、中学生から大学生まで五人の子どもを持った母親の投書によってみることにしよう。中学にいつている子どもは毎朝六時にでかけていく。早朝の自習、あるいは友だちと一緒に外国語を勉強するためである。夕方七時前後に帰ってきて、書物の包を下におくやいなや、すぐに復習をしたり作業をしたりして、一〇時半前後にやっと就寝する。日曜日は休息の日であるのに、平日とくらべてもっと忙しさが加わることもある。大学の子どもは帰ってくるときは、いつも講義録やノートの大きな包をかかえている。二言三言話す暇もあらばこそ、包を開いて読んだり、書いたり、忙しさが止むことはない。中学の子どもも山のような教科書やノートを抱えて復習に忙しい。「なぜ日曜日もこんなに忙しくしなければならないの」と母親がたずねると、「各科の先生はみな日曜日がお気に入り、時間が無いといえは、まだ日曜日があるじゃないか、とおっしゃる」というわけである。

その復習のありさまは、大半はノートを暗記することであり、教科書の定義、定理にかじりついている。書物を読んだり、抜き書きしたりしているが、どうも完全に理解しているようでもない。勉強の仕方もいきいきしていない。また、課外の読書は非常に少ないようで、三番目の子どもはここ数日の新聞を全然読んでいないし、他の一人は忙しくて新聞の大見出しだけ見たという。昼休みや放課後読む時間はあるといえは、一週間の会議の名前、クラス会、隊会、団会、学生会等をあげる。課外の文娛体育活動に参加することも非常に少ないようだ。それにしても、子どもたちの大部分の時間は外国語と数理化の勉強に費され、語文を読んだり書いたりすることが少ないのはどうしたことだろう（一九六五・一〇・二三）。

かくして点数問題に議論は集中する。「革命のために学ぶ、点数の束縛をうけない」、「知識の主人となり、点数の奴隷とならない」、これは一致した意見である、と光明日報の編者はいう。そこでどのようにして点数の束縛から脱

け出すか、ということである。まず、試験の全廢、したがって点数で学生の成績を標示することを止める、という提案であるが、これは簡単に否定される。試験は教と学を検査する一つの方法であり、点数は教と学の程度の標示である。もちろん試験は無限の実践にくらべれば、有限なものにすぎず、点数は学生の学習状況を絶対的には説明することができない。しかし試験の方法を改め、問題の内容を不断に善くすれば、点数は学生のある時期のある学科についての理解情況、運用能力を標示しうる。ゆえに点数を通じて学習情況を検査し、学習中の問題を発見し、自分の学習をさらによくすることができる（一九六五・一二・一八）。これは点数によって啓発に到るといふ、いわば試験を合理化する主張であるが、さらに、「實際工作中的の問題は、書物の上の問題とくらべてずっと複雑であり、試験問題や練習問題よりはるかにむづかしい。試験問題や練習問題にさえ学んだ知識をいきいきと運用して解答できないで、どうして自力で問題を分析し解決する能力を養った、といえるだろうか」（一九六五・一二・四）、という意見もある。現在あるものに疑いの眼を向けない、現にあるものの長所をみようとすむいかにも素直な人の言ではあるが、時と所によっては順応主義、適応主義とのそしりを免れない意見である。

試験については、参考書やノートを持参してもよい「開卷考試」が提唱され、また学生の負担軽減の声にに応じて、教学质量の「少而精」を実施する学校も多かった。教科目数、教学時間、教授内容を「少」なくし、一定の時間内で、基本的知識、理論、技能を身につけさせるよう教学の質量を「精」にすることである。ある大学では次のようなプロセスをへて実行した、という（一九六五・一〇・四）。すなわち、一つの課程の教材の歴史的な沿革と現状を分析し、その課程が属している専攻科の担っている任務を研究し、この課程の性質、設置の目的と要求を明らかにし、その他の課程との関係をはっきりさせる。その後でこの課程を保留するか、強化するか、切りすてるかを決定する。保留し強

化する課程の教材は章ごとに節ごとに、その内容を分析研究し、主次を分け、最も基本的な内容を充実し、煩瑣なものは削除した。このことのために地質生産工作の現状と必要と、学生の現在の知識基礎と可能性、すでに卒業した学生の態度、能力などについても調査研究を進めた。学生を組織し生産現場の労働者を招いて座談会を開いたり、また専門家を組織して野外実習を行ない、野外隊の同志の意見を求めたりした、という。これは一つの例であるが学生の負担を軽くするという目的は、かなり達成したのではないか、と思われる。

その他、学習負担を軽くするために、講義の内容を印刷して前もって学生に渡すとか、学生の方からは予習の効果について報告するものもあつた。ある学生はいう、「いままで予習は必要ないと思っていたが、ノートを少なくするに、さきに教科書を読んでおき、教科書にあるものは授業中ノートしない。何べんか読むとわからない問題が発見でき、授業のときとくにその箇所はよく聞き、しっかり考えて理解をし、ノートもとる。このように問題をもつて授業を聞き、難点を集中的に攻め破るのはたしかによい方法であると知った」と。これは二重の意味で効果のある方法である。先生が講じ、学生はただ聞く、ノートする暗記するといったまったく受身の姿勢で、一時間をすごし頭は全然用がないという状態よりはよいし、また一時間中精神を緊張させ、先生の話に注意を集中させているつもりで、かえって重要な点を聞きもらしたりするというよりはずっとよい。それにしても、予習を必要と感じなかつたという一事をもつても、学生の従順さというか受身の姿勢、先生への盲信ぶりが窺えるのである。

学生の学習方法の一つとして「偏科」の問題があつた。個人の好みや特長を伸ばすために、特定の科目を重点的に学習することをいうのであるが、この主張にたいしては大多数の人が反対を表明している。その理由は次の文章によつて代表される。「学校が設けている必修の課程は、すべて将来の工作与密接な関係があり、党のわれわれにたいする

基本的な要求が体现されている。かつ、各科のあいだには互いに連係があり、偏廢することはできない。例えばわれわれの外国語の学習の場合、外国語はもとよりよく学ぶべきであるが、漢語、世界史、政治経済学などもやはりよく学ぶべきである。もし漢語をよく学ばなかったら、翻訳工作をよくすすめることができない。もちろんある課に精力、時間が多くなるのは必然であり、合理的である。しかしこれは『偏科』ではない。『偏科』とは自分勝手に『重要』であるとし、『興味の感じる』課程をよく学び、『重要でない』、『おもしろくない』と思う科目は基本的に要求されていることさえやろうとしない畸形的な発展をしているものをいう。（一九六五・一一・一九）。ここに当時の学生の心情がよく表現されていると思う。与えられたものをまじめに忠実に学ぶこと、そして労働者、農民に奉仕し、社会主義社会建設のために働く、これが党から与えられたものをまじめに忠実に学ぶこと、そして労働者、農民に奉仕し、社会主義教育を受ける人たちはエリートであり、学校でよい成績をとれば、将来社会の各部門で指導的な地位につくことは約束される。またそのことが人民に奉仕することになる、といった主観的には非常に真摯な思いなのである。ここからは与えられたものの内容や教育制度やについての根源的な疑問は起りえないし、それに社会主義社会を実現するには、いわゆる「近代化過程」をへなければならぬという考えともかかわって、ますます学習にはげむということになる。このことがまた自分の利益とも結びついているのである。現状を直視し、根本的な批判の目を向けることから逆の方向にいくのも無理はない、と思われる。

このような状況のなかで、不知不識個人主義的な思想が芽ばえ、大衆から離れ、だれのために学ぶかということが不明確になってくる。すなわちよい点数を得てよいところに就職するといった、もっとも身近かな目標に焦点がかわされるのである。次のような現象はこのことをうらがきする。「開卷考試」が実施されてから、ある学生は、暗記す



する必要がなくなり、試験には参考書が見られるので、必ずしもノートすることはないときめている。その結果学んだことの基本的なことも理解できていない。試験になってはじめて資料をさがし教材をよみ、この一段を抜きだし、あの数段をひろいだして答案を作成している(一九六五・一二・六)。また、学習負担が軽減されたあと、気がゆるんでしまった学生もでて、くつろいでセーターなんかを着こみ、町に散歩に出たり、友人を訪問したり、日曜日には三三五五ほうぼうをブラブラして買物をしたり遊んだりしている。土曜日には映画をみにいき、映画にもいかず家で勉強している学生をつかまえて、「君は劳逸結合の精神に符合しない」といつてからかったりする。こういう学生が出現するにおよんで、あらためて学生たちは自分のうちにひそむ個人主義的な観点に目を向けるのである。

それはどのような形をとってあらわれているか。頭の中を「おそれる」という字が占拠している、とある学生はいう。「まちがうのをおそれる」のである。まちがった考えをするのをおそれ、討論であやまりをいうのをおそれ、作文で見当違いのことを書くのをおそれることである。その学生はいう、「私は中文を学ぶものであり、文芸は鮮明な階級性をもっている。もしまちがえば観点立場の問題におよぶ。こういう考えから、すべてに顧慮するところがあり、それがたやすく『謹慎』に変わり、軽々しく意見を發表させなくした。このやり方の『いい点』はまちがいつこないことである。……まちがいをしでかさないために、権威や専門家を盲信し、頭を暗記カードや書物の書抜で埋め、『言必有拠』につとめた。かくて多く考えることができなくなり、すすんでは多く考えることを願わなくなった。考えても判らない問題、判っている問題(これは専門家の見解であるが)にはあえて質疑せず、理解できないものは丸暗記した」(一九六五・一・一六)。また、先生や学友たちに異なる意見を出す勇氣がなかったという学生は、一つには、先生に妄自尊大の印象を与えて師生関係に影響するのをおそれ、二つには、学友たちの間に争論をひきおこし対立面を

つくりだし、お互いの感情を傷つけるのを心配し、三つには、誤りをいって人に笑われ、言いまかされて面子をつぶされるのがいやだったからである、という（一九六六・一・八）。事実、討論のなかで、「君は毛沢東思想に違背している」という帽子（レッテル）をすぐに相手にかぶせることがよくあったようである。

これは消極的な個人主義思想のあらわれといえるが、もっとあからさまなこともあった。医学を学んでいるものなかに次のように考えるものがあるという。「医者には人から尊敬され、『鉄飯碗』（くいばぐれがない）である。名をなし家をなしやすく、卒業後大都会の大医院で仕事ができ、生活も安逸である。……医学系は最も前途のある專業であり、口腔系は人から『歯抜き』とされるが、医学系から分れたもので、次に位する。衛生系は『蠅たたき』であり、最も低くランクされる」（一九六五・一〇・二三）。

教授法が改善され、学習負担が軽減され、学習方法が工夫されても、決して学生がいきいきと主動的に学ぶようにならないこと、以上のごときである。思想が変らなければ、「誰のために学ぶか」ということがはっきりしなければ、学習問題は解決しないということを、主に農民労働者階級出身の学生が自覚しはじめるのである。解放軍兵士であった雷鋒に学ぶというキャンペーンが、一九六三年以来なされていて、それによってはじめて誰のために学び、どのように学ぶかということを考えはじめた、というある学生は述懐している。「私は雷鋒と同じように貧農家庭出身であり、父母は旧社会で牛馬にも劣る生活をしてきた。私がいま学ぶことができるのは共産党、毛主席のおかげであり、私は当然革命のために発憤して学習すべきであった。ところが私は父母に報いるために、またよい点数を得るために学習した。雷鋒とはまったく違っている。彼の成長した道は私を啓発し、革命を思えば必ずよく毛主席の著作を学習しなければならぬことを判らせた」（一九六五・九・二四）。一応問題は行くべきところに行きついた、というべきで

ある。毛沢東が早く一九五七年に、「最近、インテリ階級や若い学生にたいする思想工作は弱くなってきていて、いくつかの偏向も生じている。政治とか、祖国の将来とか、人類の理想というものにかかわりあう必要はない、マルクス主義は一時は流行したが、いまはそれほどはなくなっている、といったような考えをもっている人が、一部にある」(「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」、と指摘した事態が相当広範囲に浸透していたということである。その克服への具体的な実践には文化大革命をへなければならなかったのである。

## 二

文化大革命後の中国の教育は、毛沢東の教育に関する指示にしたがって教育改革をいかに遂行していくかという一点に焦点がしばられている。教育に関する指示のおもなものは三つである。「われわれの教育方針は、教育を受けるものを徳育、知育、体育のどの面でも発達し、社会主義的自覚をもち、教養のある労働者に養成することである」(一九五七・二二)、「……学生も同じで、学業を主とし、同時にほかのものも学ぶ。つまり書物について学ぶだけでなく、工業も学び、農業も学び、軍事も学ばなければならず、またブルジョアジーも批判しなければならぬ。修業年限も短縮しなければならず、ブルジョア知識人がわれわれの学校を支配している現象を、これ以上続けさせてはならない」(一九六六・五・七)、「教育はプロレタリアートの政治に奉仕し、教育を生産労働に結びつける」(一九六六・八)。これらの指示はある理念を表現し、一般的な方向を示しているだけであって、その具体化は地方により、学校がおかれている条件によって異なった形をとる。それぞれ独自の改革方式をこころざし、またよそのやり方を見習いながら、今ようやく三年から四年が経過して、その経験がいろいろと報告されているところである。以下において、毛沢東の指

示が実行された結果、どのような現象があらわれたかをみて、次に学校教育のさまざまな改革のころみを紹介し、三番目に、その改革のむずかしさや問題点を摘記し、おわりに、その教育改革の意味、あるいは人間の教育史の上に占める位置などについて論究してみたいと思う。

(1)

小学校、中学校の段階において、農村では、毛沢東の「農村では労働者階級の同盟者——貧農・下層中農が学校を管理すべきである」（一九六八）という指示が多種多様な形を見せて実行されつつある。たしかに、教育を全国のすみずみにまで普及するという段階であって、われわれの目からみれば、まだそんな程度かと軽く見過ごしてしまいかねない現象であるが、教育を自分たちの手でおこなう、学校教育の主人となるという考えのもとになされつつあるころみは、受教育権という思想になれてしまっているものにとっては、まことに新鮮なものとして目に映るのである。

それはまず「正規の学校教育論」との対決からはじまる。「山間地帯の住民は分散しており、生徒は少なく、学校を設けるだけの条件がない」とか、「質を保証するために、正規化しなければならない」といったことや、教師は何かにつけて恵まれないという「教師不運論」が根強くあり、それらが民営学校の運営に影響を与えていた。例えば、教師が授業を気やすく休む、全日制の学校ではそれは減多にないのに。また教学条件が劣り、工夫して教えても、何の「名目」もたてることができないといった個人主義的な名利思想、教学時間が正規の学校より少ないので、教学改革をしようにもできない、といった「唯条件論」やあきらめ論などに現れている（一九七二・八・一四）。

このような思想と闘いながら、各人民公社は教育革命指導小組を設けて、学校をつくり、教育を普及するためにい

ろいろな方式をあみだしている。それは最初、学校をつくり、「一群の子どもたちが入学し、教室が満員になればよい」と考え、それ以上に配慮しなかったので、せっかく入ってもよく授業を休んだり、すぐ退学するということがあり、それを克服する必要性にも迫られてでもあった。授業をさぼったり退学したりする理由のおもなものは、家の仕事に忙しく、学校におくれてきて、事情を知らない先生に叱られるとか、授業を聞いていてもよくわからないとか、それからノートや鉛筆がないなどの経済的な理由などであった。そこでさまざまな手だてが講じられる。早朝クラス、おそく登校し早く下校するクラス、夜のクラスを設ける。弟妹をつれて学校に来ることを許すとか、山地では巡回学校、牧畜区では部落の移動に随う遊動小学校形式をとるなど、農民をして、「学校が家の門口にやってきた」(一九七二・六・一七)といわしめた。教学工作では、正規の学校の経験の豊かな教師を村の学校に派遣したり(一九七二・八・六)して教師の教学研究を強め、授業の準備や授業をしっかりやるように研究グループを組織したり、教師と農民が共同して行なう新しい試験方法を考案したりした。例えば、実際に田に来て、学んだ測量の知識を用いて、土手の量を測らせる、などである。

貧下中農の経済的負担を軽くして退学を防止するという点でもいろいろな方法が講じられている。一つは思想工作である。自分の大きい方の子どもを退学させて労働に参加させたいと考えていた一人の貧農社員に対して、昔と今とをくらべて貧下中農が文化を学ぶ重要性を説き、「合作化のあのとき、われわれ貧下中農は文化がなく、あの悪い分子が会計になり故意に破壊しようとして帳面をめちゃめちゃにした。あなたも彼をつれてきて帳面とつきあわせさせたけれども、はっきりさせることができなかったじゃないか。いまはわれわれ貧下中農のあとつぎが会計になっているが、あの悪分子と同じであるかないか」といって気持をひるがえさせたという(一九七二・五・八)。そしてとくに経済

的に困難な家庭は生産隊の労働が加減されたり、国家の補助を受けたりするが、最も重要なのは学校の自給自足をはかること、いわゆる「勤工儉学」の実行である。学校が小工場、小農場、小林場、小飼育場などを適宜経営し、落穂など食料になるものを拾い、雑草を刈り、家畜の糞を拾い、また雑貨を集めたり、葉草を採集したりする。こうすることによって師生の自力更生、艱苦奮闘の思想を養い、あわせて収入の増加をはかる、という。

ある人民公社の中小学校はこの二年來荒地を開墾して五〇三ムー（ムーは約六・七アール）の土地を造成し、それは学農基地の半分以上を占めている。また、豚小屋、鶏舎を自分たちの手で建て、小林場六六ムーを整備して四一万株の植樹をした。そして、去年の農牧の総収入は五万元に達し、学校経費の自給は基本的に実現したという。また学生は(1)農繁期休暇のときは本隊に帰り、労働に参加し生産隊は仕事の報酬を記録しておく、(2)農繁期休暇以外では、生産隊で働いても労働点数はもらえず、学校に行くようにすめられるが、休日に労働に参加すれば労働点数の対象になる、(3)学生の放課後の時間は、課外学習に影響しないという条件のもとに、糞拾いや副業生産に参加して、社員と同じように報酬が与えられる、(4)年令の小さい学生は集団労働に参加できないが、グループで小さい子どもの面倒をみて、大人が労働に参加できるようにして、同じように生産に利益をもたらす、という工合である。このようにして、中高校生と小学校の高学年の学生は自分の入用の費用の全部もしくは一部分を手にすることができ、六人の学生をもつある貧農をして、「過去の学校はあれやこれやと費用がいったが、いまの学校は勤工儉学で学校の雑費はいらないし、しかも書物やノートをくれる。農業が忙しいときや、休みの日には隊に帰って労働をし労働点数をもらう。これらの子どもが一年間に働いてえた賃金で四人分の食糧がまかなえる。子どもたちは学校でちゃんと学習しているし、これはまったく毛主席のおもいやりである」といわしめるまでになっている（一九七二・八・二一）。

これと関連して、業余教育が精力的に展開されている。その形式内容は人びとの要求、事情によっていろいろである。最初は文盲を一掃するためであったが、漸次、農業技術人材を育成するために、ある地方では一九七〇年に農民業余技術学校を創設し、それと前後して、農業技術、農機、牧畜、微生物、「はだしの医者」などの專業班がひらかれたという（一九七二・六・二八）。また、小学校卒業生の継続学習を保証するためのものもある。四〇パーセントしか中学に進学できないので、のこりの六〇パーセントの学生のために業余初中班を設けている地方もある（一九七二・五・八）。部落ごとに集中して学び、溝をはさみ路地で通じている家が一緒に学び、夜学にくるのが困難な婦人や老人には通信教育で保証する。教科書は郷土の特色を豊富にもりこんだ識字教科書を自ら編集する。農電班は「流動方式」をとり、施工現場で学習し電気をあつかい実践をする。農機班は農閑期に集中的に学び、農繁期に隊に帰って実践し、前後三期の間に、一一の大隊、一つの発電所として一つの林場の間の九〇里余り（一里は五七六メートル）を結びつける架空線路および安装工程を行ない、技術知識を学ぶだけでなく、国家のために一八万円の財富を創造したという（一九七二・六・二八）。

もちろんこの業余教育にも問題が多くある。ある隊では業余教育をやったりやらなかったり、また学校にきたりこなかったりする人があって、思想教育の必要が強調された。ある大隊の次のような経験が報告されている。(1)、生産作業が忙しい季節と工作任務が重いときに業余教育はくずれやすい。「いまは忙しくて、のみこもうとしてもどにつまってしまう。またいつか学習しよう」といった考えにたいして、「逆水行舟、不進則退」の道理を討論を通じて説き、学習時間やグループの形を安排して、業余教育を堅持した。(2)、階級闘争の新しい動きが出現するときにもくずれやすい。一九六九年から七〇年にかけて、三〇名余りの都市の知識青年が大隊に入り、さらに二〇名余りの大

学専門学校の卒業生が労働鍛錬にやってきて、貧下中農の再教育を受けたとき、村内の階級敵はこの機をのがさず、「読書無用論」をとなえ、業余教育に冷水をぶっかけた。一人の貧農女子社員がこの毒にあたり、自分が学ばないだけでなく、子どもも学校にやらせない、ということがあったが、毛主席の路線闘争と教育革命に関する教えを学び、革命的批判を通じてことなきをえた。(3)、学習中に困難な点にあうと、業余教育は堅持するのが容易でないこと、などである。以上要するに、業余教育が単純に文化を学ぶだけが目的であると、年々おこない、年々さびれ、堅持することができないことを知り、文化の学習と政治の学習を結びつけるという原則を樹立したという。すなわち、(1)、文化の学習と毛主席の著作の学習とを結びつけること。「人民に奉仕する」、「ベトナムを記念する」、「愚公山を移す」、「人の正しい思想はどこからくるか」などを基本教材にして学習するうちに、認識ができ、書くことができ、講ずることができ、用いることができるようにする。そして世界観の改造を促進し、また革命実践を指導する。(2)、文化を学習することと革命大批判とを結びつける。ブルジョア階級の人性論（後出）や階級闘争終滅論を、村の階級闘争の事実とあわせて批判を進め、ある人が遠くの親戚より近所が親しく、近所より自分の家族の方が親しいといった謬論をまきちらし、幹部に動揺を与え、ダラクさせようとしたとき、親しいか親しくないかの区分は貧下中農の気持ちになれるかどうかできまる道理を説き、力強く批判をおこなった。(3)、文化を学習することと政治運動とを結びつける。業余教育を通じて政治運動に関係のある文件を伝達し、学習討論し、そして文化を学ぶことと結びつけるのである。なにが唯物主義であり、なにが唯心主義であり、なにが正しい路線であり、なにが誤った路線であるかをはっきりさせなければ、すぐに騙されることを認識する。(4)、文化を学習することと農業は大寨に学ぶということとを結びつける。自力更生、艱苦奮闘の精神をわれわれの実際と結びつけて学び、塩分の多い土地を、科学実験を行ない、淋、洗、



溶、抗の方法を発見して、改良することができた（一九七二・五・八）。

以上、農村における教育の普及への意志と努力を概観したのであるが、これは都市においても見られるところである。例えば、北京市の中小学校がざかに工場を経営し、機械の部品や金物類、電子製品、光学計器類を生産し、印刷、木工、加工工場を経営し、手工業の作業場をひらいている学校もある。教室での授業と現場での実習を結びつけ、理論を実際と結びつけることによって、学校の工場経営活動は社会主義的自覚をもつ教養をそなえた労働者をそだてあげるのに役立つっており、また学生に勤儉節約の精神を強めさせ、国家のために富をつくりだすとともに、国家の学校経費を大幅に引き上げている、という（「北京周報」一九七二・第二号）。しかしいまはこれ以上にはふれない。

次に挙げられるのが、知識青年（おもに中学、高校の卒業生）の「上山下乡」の運動である。これは毛沢東の「知識青年は農村にゆき、貧下中農の再教育を受けることが必要である」（一九六八・一二）という言葉の実践であり、また中学高校を卒業したものは、農民、労働者あるいは解放軍兵士として二年ないし三年以上の実際労働を経験してから大学に進学する、ということになってから、大段的に展開されているものである。知識青年の上山下乡、これは一場の偉大な社会主義革命である、といわれる。その目的、意図を国家計画委員会労働局の文章（一九七二・六・六）によって概観してみよう。

一つは、プロレタリア革命事業の後継者を育てること、もう一つは、農村に目を向け、農業を支援して、社会主義の新しい農村の建設を加速する、という二つにしばれるようである。前者について次のようにいわれる。知識青年は農村において、広大な貧下中農から、毛主席の革命路線にたいする深厚な感情を学ぶことができ、愛憎分明な階級的立場、社会主義を熱愛する高貴な品性、自力更生の革命精神、艱苦素朴な優良作風を、そして三大革命闘争の豊富な

経験などを学ぶことができる。そして、知識青年は長期に無条件に農村にいき、貧下中農と一丸となって、虚心に再教育を受け、艱苦練磨を受けることによって自分の立つ位置をプロレタリア階級の方に移すことができるのであり、誰を愛し誰を憎み、そしてどのような人間になるかという問題を根本的に解決できる。同時にまた、三大革命闘争に参加してはじめて、才能を真に増長することができ、大いに作すところがあり、さらに客観世界を認識し改造する闘争の中で、発見するところ、発明するところがあり、創造があり、前進があるのである、という。

これらはまた、かつての、農村を軽視し、農民を軽視し、農業労働を軽視する古い伝統的な觀念との徹底的な決別を実行することでもある、と位置づけられる。ブルジョア階級の立場にあるものは、唯心主義の先驗論を堅持し、青年を實際から離れ、労働から離れ、労働人民から離れた精神貴族にしようとして、「書物を読んで役人になる」、「名を成し、家を成す」、「閉門して修養する」、「個人で奮闘せよ」などの論をまきちらし、はては、「下郷メッキ論」や「労働懲罰論」をもちだして、下郷して農業に従事することを「恥辱」であり、「下賤」のことである、ときめつけたという。このように労働を蔑視し、労働する農民をうとんじ、彼らの生活を厭悪するのは、労働が自然界とともにすべての財富の源泉であり、労働が世界を創造し、人類自身をつくりだした、という認識とは真向うから対立するものであり、どうしても克服しなければならぬ課題である、という。

一般に、上山下郷した青年たちは、農村がたしかに自己の世界観を改造するよき戦場であり、貧下中農がよき教師であることを深く体得している、という。「いま、われわれの考えることは、個人的な苦しみやわずらわしさではなく、中国革命と世界革命の偉大な歴史的使命である」、「山を見て山に親しみ、水を飲んで水のうまさを知る。心は貧下中農と同じくし、志は農村にあって革命をやりぬく」。青年達の言であるが、単なる口先だけのことでなく、実感がこ

められていると想像しうる。もちろん彼らにも迷いが生じ、悩むこともあるであろう。農村に来て三年余りたつうちに、同級生たちのあるものは解放軍に参加し、あるものは大学に進み、工場に入っていくのを見たある青年は、「このように長い間、山の谷あいにくすぶって、鋤を肩にしている。いったい見込があるのだろうか」とふと思う。しかし、これこそが古い伝統的な観念のあらわれであると、すぐに気がつき、そんなものに頭を下げてはならない、それと闘う戦士となるべきであった、と思いを新にするのである（一九七二・八・一六）。

さて、後者については、都市と農村の差を小さくし、労働者と農民の連盟を強め、プロレタリア階級の専政をしっかりと固めるといふ目標の線にそっているものである。農業をよくして、新しい農村を建設するには、マルクス主義、毛沢東思想で農民を武装し、毛主席が制定した一連の農村工作の路線、方針と政策を貫徹し、農民の社会主義的積極性を大きくゆりうごかすだけでなく、党や国家が農村に物資、技術、財政の支援をし、人材の支援をする必要がある。農村は文化科学知識をもった革命青年を痛切に求めているのである。農村の一般的な文化水準の向上と、科学技術革新の一翼を荷うべく、青年たちは期待されているのである。そして彼らはそれによく応えているようである。多くの青年が各地で共産党や共産主義青年団に参加し、各級の指導グループに選ばれ、省、市、自治区の党委員会委員や革命委員会委員に当選し、生産大隊の党支部書記、革命委员会主任、团支部書記、会計、それにはだしの医者、民営学校の教師などの仕事を担当していることが報告されている。

ところで次に、これらの知識青年を受け入れる側の体制が、いかにきめこまかな配慮のもとにたてられているかというところを、黒龍江省のある県の場合についてみてみよう（一九七二・七・三）。この県には一九六八年以来、一一〇〇名余りの知識青年が各大隊に定住し、県全体に一七の青年居住地に分れている。県委員会は、知識青年工作は全党の

任務であるとし、全党、各部門そして広範な大衆を動員して共同してこの工作に当っている。下郷知識青年のいる公社には、一名の専職幹部を配し、各青年居住地には一名ないし二名の政治工作の経験のある幹部もしくは老貧下中農が派遣されて指導員になっている。そして大隊の広範な貧下中農は青年たちに、村史、家史、党内の二つの路線の闘争史をつねに語り聞かせる。ある大隊の党支部書記は青年たちと一緒に憶苦思甜活動を展開したり、「万人坑」を參觀し、老労働者を招いて階級教育を進めている。またある大隊の党支部書記は、青年の居住地にいき、青年たちとともに食事をし、住み、労働し、学習して再教育工作を行なっている。青年たちは貧下中農のたすけによって、畑を耕したり、鋤いたりの農業労働はもちろんのこと、食事のつくり方、野菜づくり、豚の飼い方などもならない、柴、野菜、肉卵は自給できるようになる。そして知識青年は、一般の公社員と基本的に同一労働同一報酬であり、食料は十分に支給され、住居もちゃんと配慮されている。以上要するに、ある特定の少数の人が、再教育工作に従事するのではなく、農民一人ひとりがその任務にたずさわっているということがわかる、と思う。

最後に、知識青年が農村の文化科学水準を高めるのに大きな役割を果たした例を二、三あげてみよう。まず一人の貧下中農の話から。五人の知識青年が彼の公社にやってきたとき、これは毛主席のわれわれ貧下中農にたいする信任であり、きつと青年たちをよく教育し、よくそだてあげて革命のよき後継者にしなければならぬ、と思ったという。そして青年たちは彼らとともに毛主席の著作を学び、文化を学ぶことを教え、以前には字がよめなくて、牧畜を發展させる科学技術を掌握することができなかったが、それも可能になり、それよりも青年たちは家畜を飼養する技能をすみやかに身につけ、家畜の病気を診察する技術をマスターして、今まで大きな被害をこうむっていた豚肺疫を、ここ二年ばかりは予防することができた、という（一九七二・七・三三）。その他、ある女子知識青年が、二・三〇種類の

害虫を殺す細菌農薬殺螟杆菌の培養製造に成功し、農業生産の増大に大きな貢献をした例も報告されている（一九七二・八・一六）。

これも女子知識青年の場合であるが、ブルジョア階級の人間性論、ヒューマニズムを批判する文章を書き、おりから開かれていた旧地主にたいする大批判会において、社員が理論を実践と結びつけ、問題を明らかにするのを大いに助けた、という。彼女はそれまでにこのテーマについて二篇の文章を書いていたのであるが、最初の文章は、人間性論が結局どういう色を呈しているのかはつきりしない、と指摘され、次には、各生産隊で調査を行ない、地主ブルジョア階級が農村で撒きちらした多くの反動的な諺語を蒐集して、それについて批判を加え、これで地主ブルジョア階級の人間性論は批判打倒できた、再び現れることはないだろうと満足していたところ、一人の旧地主分子が管理に服さず、山ネコストをはじめた。彼女と民兵がこれを見つけ、この男に批判闘争を行なったところ、その男は事がすんだあと悄然として彼女のところにやってきていうことには、「私はもうとします。元気がありません。あなたは私を批判し、私をつるしあげた。人間にはもっと『良心』があってもいいのに」と。彼女はこのような情況にでくわして、さきの文章は理論的分析が不十分で、根もと深くほり出していないことを覚ったという。たしかに、その意図はともかく、いかにも優等生的な論文作成という気味が感じられるやり方ではあった。

そこで毛主席の、「人間性というものはあるのか、ないのか。もちろんある。しかし具体的な人間性があるだけで、抽象的な人間性などというものはない。階級社会にあっては階級性をおびた人間性があるのみで、階級性を超えた人間性などというものはない」という論述を彼女は真剣に学習し、同時に、老貧農に教えを求めた。「解放前、私と地主某とは一つの家族であったが、彼は私を人間としては扱わなかった。その家で働いていたとき、御飯さえ満足に喰

べられなかったくらいだ。階級社会では超階級的な『良心』なんて絶対にない。地主ブルジョア階級のいう良心は人を騙すでたためにすぎない」と言葉すくなく語るのを聞き、彼女は大いに啓発され、今一步社会調査をすすめ、マルクス、毛主席の地主ブルジョア階級の人間性論を批判する論述を刻苦して学習し、そして解放前の地主ブルジョア階級が人民を搾取し、圧迫していた罪悪事実と結びつけて、第三回目の批判論文「人間性論は資本主義復辟論である」を書きあげ、大衆のために大きな貢献をした、というわけである（一九七二・八・二二）。一人の知識青年が農村にきて住み、農民の間で生活することにより、農民の直接の助けによって、いかに自分自身を成長させていったか、そしてそれがいかに農民のためになったかということを示す、これは一つの例である。

知識青年を農村に送るという方向と並行して、実際に労働の経験のある労働者、農民、兵士のなかから、大学の学生を選抜し、また技術者を養成する、という方針が実行されつつある。中国の最大の工業都市である上海にある精密研削盤製造工場の上海工作機械工場の場合が、後者の典型としてあげられる。

一九六八年九月に、工場の「七・二一」労働者大学は開設された。学生は五二名（うち女子学生は七名）で、その大多数は初級中学卒業程度の教育を身につけていて、実践の経験は平均一二年以上であった。第一期学生の修業年限は二年一〇カ月であり、すでに一九七一年七月に卒業して、いまは第二期生九〇名余の労働者が入学している。第一期生は毛主席の「学校でなん年か学んだあと、ふたたび生産の実践のなかにもどる」という指示を実行し、三四名がもとの職場にもどり、八名は国内の建設の支援に、一〇名は工場内の磨床研究所に配されて科学研究と設計工作に従事している、という（一九七二・七・二二）。

この工場では、もともと労働者出身の技術者が二五〇名いて、全工場技術者総数の約四五パーセントを占めていた。

この人たちは、大学高等専門学校卒業の技術者にくらべて政治的自覚が高く、技術関係の仕事にも強く、一九六〇年以後、とくに文化大革命いらいは全工場の新製品はほとんどこれらの労働者出身の技術者とその他の労働者が革命的知識分子と協力して、設計製造したものとされる。このような事実をふまえて、この工場は大学の設立をいちはやく決めたのである。まず、どのような専攻科目を設置するかをめぐって二つの対立する意見がでたという。一つは、研削盤の製造を主とする意見、もう一つは、研削盤の設計を主とする意見である。討論を通じて次のことが確認された。工場経営の大学は単に労働者出身の技術者をなんらか養成するためのものではなく、労働者階級に毛沢東思想で科学技術の陣地を改造させ、占領させるためのものである。養成された学生は研削盤の製造工程を把握しなければならぬだけでなく、設計もできなければならない。設計は工場の技術分野のカギであり、なが年らいブルジョア階級の技術「権威者」によっていちばんがっちりとおさえられていた陣地だからである。結局、研削盤の設計に重点をおき、「研削盤の設計と製造」という専門科目を設けることになった、という。

次に、講座の設置をめぐっても議論が闘わされた。工場内の生産と技術の発展の必要からみて、七科目の専門講座を設ければそれだけで十分だという人、それだけではどうも「大学らしくない」と考えるものもあった。また、数学の微積分や英語は工場では必要ないという人もあったが、これはかつてはそれらがいかにも万能で役に立つようにいい、いま労働者がこれらを身につけてプロレタリア階級の政治に奉仕しようとする、役に立たないといいたすのは下ごころがあつたのことだ、と事実をあげて批判された。こうして、ふるい大学の機械製造専門科目の三〇いくつかの講座にたいして分析、批判をくわえ、工場の生産、技術発展の必要にもとづいて、製図、数学、力学、液圧、電気機器、研削盤の設計と製造、外国語の七つの講座を設けた、という。

そして教育のありさまを素描すれば、最初は学生の実情にもとづいて、短期間の基本知識の学習をし、それを実践に応用し、製図の技能を身につけるために、一台の研削盤の寸法に合わせて図面をつくり、研削盤の総体的構造についての感性認識を深めさせた。次の段階では、学生をいくつかの設計グループに分け、教員の補導のもとに、製品の供給先を訪問し調査研究をして、設計についての意見を知り、そのあとで設計をしながら教学をすすめた。教員は学生が仕事のなかで出あった問題をとりにあげて授業と個人指導をおこなった。第二学年に入ると、学生は前段階で設計と製造に参加したことをふまえて、研削盤の設計と製造の理論（そのなかには高等数学、液圧電気器具、研削盤設計製造などの諸講座が含まれている）を比較的に系統的に学習し、理論水準を高めた。実践の基礎ができている学生には、理論の学習はわりあい受け入れやすかった、という。最後の段階では、学生たちは職場に配置され、労働者や革命的技術者と一緒に、科学研究、設計、設備製造などの仕事にとりくんだ。こうすれば学んだ理論を生産の実践に適用し、教学の効果を直接たしかめることができるし、実践のなかで理論をさらに学習し、実際問題を分析、解決する能力を高めることもできる、というわけである。（北京周報、一九七一・第三三号）。古い大学専門学校を卒業した学生は三、四年から五、六年学習し、卒業して二、三年の実習をへて、やっと設計ができるようになる。「七・二一」大学の学生は学習時間は短く、卒業後もそんなにたいしたことはないだろうという人たちの予想を裏切って、これらの学生は各職場に入っていきさまさまの業績をあげ、新しい型の労働者、技術人員と称されていることが報告されている（一九七二・七・二二）。

文化大革命のなかで現れて、全国各地で定着しつつあるものとして、「五・七」幹部学校がある。各省、市、自治区や、多くの地区、県、市にはみなこの学校があり、中国共産党中央、國務院各部門だけでも、一〇〇校以上設けら



れている、という。「広範な幹部が下放して労働すること、これは幹部があらためて学習する非常によい機会である。老人、虚弱者、病人、身体障害者以外は、だれでもそうしなければならぬ。現職の幹部も、何回かにわかれて下放し、労働に参加すべきである」(一九六八・一〇)という毛沢東の指示にもとづくものである。この幹部学校へはいつて学習するものには、二万五千華里の長征、抗日戦争、解放戦争に参加した古参幹部、解放後革命工作に参加したものの家庭の門から学校の門に入りさらに学校の門から機関の門に入った、実際の闘争経験に乏しい「三門幹部」、紅衛兵から成長した新幹部などがある。彼らは幹部学校に入ってからも、もどどおりの給料を支給され、もどどおりの福利待遇をうける。学習期間は普通一年前後、短いので半年、長いので二、三年である。その学習内容はさまざまであるが、例えば、穀物・野菜・肉・油を自給自足し、綿花を栽培して自分らの着るものをつくる。その過程で、労働者、農民の思想と感情を体得する、といったことであるが、要するに幹部の再教育である。この制度もいくつかの問題を生じながら、それらを克服しながらより強固に根をおろしつつあるようである。「五・七」幹部学校については、「北京周报」一九七二年第二〇号、および朝日新聞社「科学と労働を結ぶ教育改革」などを参照されたい)

(2)

中国の教育改革は上述のような教育的現実のなかで、小中学校、大学高等専門学校など各段階の正規の学校において、前掲の毛沢東の指示をその具体的な条件と結びつけて実現しようところみられている。ここでは、改革への努力、方向、方法などもっともよく見やすい大学を中心にしていきたいと思う。多くの大学ではここ一年ほど前から、いわゆる労農兵新学員を募集しつつあり、教育改革は焦眉の的になっている。労農兵新学員というのは、労働者、農

民そして解放軍兵士から大学に派遣された学生のこと、彼らはまず自由意志によって志願をし、工場、鉱山、農村人民公社の大衆や、解放軍兵士の推薦を受け、各単位の指導部（革命委員会）の承認をへて、学校が再審査して許可されるものである。年令は二〇歳以上である。かれらの多くは各種の生産現場で少なくとも三年の労働をへた実践の豊かな知識青年である。彼らは政治的自覚はしっかりしているが、学力水準は中学卒業ぐらいから、高校卒業の学力をもつものもあるというわけで、かなり差がある。大学の教育改革はこれらの新学員の入学にともない、新たな高まり、局面が見られるという。いままでにも「理工系」の改革案は発表されたこともあるが（例えば「紅旗」一九七〇年、第八期）、いまはそれぞれ二、三年のテスト期間をへて、いろいろな問題をかかえながら新しい道を探りだし、ようやく学生を受け入れる体制がととのった、という段階である。理工系はなんといっても具体的な「物」や技術があるので、文科系とくらべて、少なくとも改める場合の手がかりをつかみやすく、それだけ実績をあげているようであるが、文科系も学生募集にまでこぎつけ、改革の土台はできたようである。では理科系からみていきたい。

武漢大学革命委員会教育革命組の報告（一九七二・七・一二）によれば、毛沢東の指示にしたがって、ここ二、三年来、次のような具体的な実践を試みてきたという。同大学の理科系では、一八の教育革命実践隊を派遣して、四〇余の工場と、工場大学提携関係をうちたて、そのうち二二三の工場とは長期の提携である。また工場と協力して三期の短期訓練班を組織し、三二の技術革新の新しい項目を完成した。これらの工場より三〇名余りの労働者兼職教師を大学に招聘した。一〇の専攻科の一千名余りの教員学員が二五の工場（もしくは公社）に入り、教学活動を進めた。以上の実践経験から、旧い大学の三脱離（プロレタリア階級の政治、労働者大衆、生産の実践からの遊離）の状態を改変し、毛沢東が提出した教育方針を貫徹するためには、大学の門を開き、工場と学校とが提携し、学校が工場を運営し、そ

して教学、科学研究、生産の三つを結合する新体制を建立することが必須のこととして証明された、という。

もちろん、解決すべき問題がいろいろと発生したことも報告されている。それらは一度解決されるとそれで万事問題がなくなるというよりも、いつでもそのときに解決への努力をしなければならぬような性質のものである。その一つは、学校が工場を設立したあと、それと工場学校提携との関係をどのようにするか、すなわち前者を主とするか、後者を主とするかという問題である。ある意見は、教育は三大革命実践（階級闘争、生産闘争、科学実験）と結合するのであるから、学校が工場を運営することを主にすべきである、とする。というのは、「校外の工場は遠い水、近い渴きをいやさず、よく見るにはよいが、手を働かせるには不便である」、それに学校工場は自分のものであり、教学の先進性と多様性の要求を満足させることができる、というものであった。別の意見は、学校と社会とを声息相通じしめ、知識分子と広範な労働兵大衆とを結びつけ、教育を三大革命実践と結びつけるためには、工場学校連携を主とすべきである、というのであった。この二つの認識については、討論でどちらかにきめるのではなく、それぞれの案で実践を進めた、という。学校工場運営を主とすると主張した専攻科では、工場の建設に努力し、教育革命実践隊を派遣することもせず、教学にも外に出なかつた。そして学校工場の生産品が教学の必要を満足させないと、生産品を拡大し、生産量を増やし、工場を拡張した。たしかに、学校工場は教学理論を實際と連係させるには大きなはたらきを示したが、人力、物力とも非常にひっぱくして、受身の立場におかれざるをえなかつた、という。

一方、工場学校連携を主にと主張した専攻科は、学校工場の建設をすると同時に、教育革命実践隊を積極的に派遣し、工場と共同して技術革新を展開し、労働者の実践経験を総括して新教材を編集し、三大革命の第一線で教学活動を展開し、学校の教育革命と連携単位の技術革新を活発におしすすめた、という。一年余りの経験教訓の学習と

総括をへて、この両者はともに長所があることを確かめ、どちらか一方を捨てることはできないという認識に達した。すなわち、学校工場は規模が小さく、敏活で機動性にとみ、生産品は多様化でき、科学研究との結びつきも緊密であり、教学の不断の更新にも有利である。他方、工場学校連携は知識分子が政治上の再教育を受け、業務上では再学習をおこなうのに有利であり、労農兵の兼職教師を招聘することや、教育を三大革命の実践と結合するのに便宜である。このように両者とるべき点が多いが、ただ比較すれば、後者の意義が一層重要である、という。というのは、学校工場は教育の三脱離の問題を根本的に解決することができないからであり、ゆえに教育が三大革命実践と結合するには、工場学校連携を主として、多くの形式をとりながら大学の門を開いて教育活動をおこなうべきである、となる。

この結論のなかに、学生が単なる技術屋になってしまふのを阻止し、大衆から遊離し、大衆を蔑視する専門家にならないようにという深い配慮がなされているのをわれわれは見る。それは今までの苦い経験もふまえられているのであるが、とくに文化大革命以前、「教育を生産労働と結びつける」という旗印のもとに、学生が工場で実習をおこなったが、それは技術者としての訓練のためであり、単なる技能の伝授にすぎなかった。労働者は差別されていて、教員には直接タッチさせず、また、校内の工場は生産計画も持たず、ちゃんとした製品もほとんど製作されていないかった、という（一九七一・七・三〇）。

ところで、大学の門を開き、工場との連携を実践することにも、いくつかの問題が生じている。その一つは、どういう工場と連携するかの問題である。選んだ工場が適当であった専攻科は工場と学校の関係もよく、教育革命もいきいきと活発にできたが、不適切であった場合は教育革命は深くできないし、工場と学校の関係にも影響した。それで、連携する工場は近くで、専攻とよくあい、中小型を主にすべきである、ということになった。というのは中小型の工

場は、技術革新の矛盾も比較的きわだっているし、教学、科学、生産を結びつける結合点（拠点になる職場、という意味）を選ぶのにも有利である。そして生産規模が小であれば、学生が手を働かせる機会も多く、直観教学にも有利であるし、工場の直接の指導をかちとるのにもよい、という。

もう一つの問題は、工場と学校の関係をスムーズにすることであり、これは大学の門を開き、工場と連携すること  
が長期にわたって維持することができるかどうか鍵になる問題である、という。一つは、工場との連携は臨時のもの  
であり、教材を編み、現場教学がひとわたりすむと、任務を完成し学校にもどるといふ観点がある教師たちの頭に存  
在しており、工場の方でも、ある種の顧慮をするところがあり、学校の人たちに工場であまり忙しいおもいをさせま  
いと、いくつかの技術革新項目を隠して見せようとしめない、ということがあった。この問題にたいして、双方が工場  
と学校の連携の意義を再確認し、各専攻科は少なくとも一つの工場に、交代してであるが長期に滞在する革命実践隊  
を派遣して関係を断たないという方針をとった。そして教育革命実践隊の任務は政治的再教育を受け、業務の上で再  
学習をおこない、労働者の実践経験を総括して新教材を編集し、労農兵の兼職教師を招き、工場での教学のために万  
全の準備をする、ということであるが同時に、工場の技術革新に参加し、各種の短期訓練班や業余大学を開設し、教  
学改革の経験を不断に模索する、というものであった。

次に、工場と学校の関係で、お互いのコミュニケーションが不十分であるという現象も多くあった。例えば、学校  
側が工場新聞の発行という仕事をうけもっていたとき、作業の手順や具体的な生活問題について多くの記事を載せる  
が、教師、学生の政治思想や教育革命の問題は学校むけの新聞に載せるだけであったり、また工場の方でも、教育革  
命には口をささず、責任も負えない、という態度であった。これには、「プロレタリア階級の教育革命を実現する

には、労働者階級の指導があり、労働者大衆の参加があるべきである」という認識に達し、工場、学校の党委員会の共同指導のもとに、両方の幹部、労働者、師生の代表が参加する「三結合」の指導グループが結成され、教育革命と技術革新を統一して考えることになり、双方の風通しをよくしたので、関係がより緊密になった、という。

さらに、三つめにあげられるのは、前のことと関連して、学校はあくまでも「学習を主とする」のであるが、工場の急ぐところを急ぎ、工場の技術革新と业余教育に力をつくして貢献する、工場は生産を主とするが、教育革命に関心をもちそれを支持し、教育革命のために必要な条件を創造する、という両者の立場を明確にしつつ、しかも共同基礎を打ちたたてたことである。これは、「なすことをもって学に代える」といった理論や間接知識を学ばなくてもよいという説を斥けるとともに、労働者の親身な配慮をあらわすものである。あるとき、学生が生産中に事故を起し、それ以後手足がすくんで、大胆に操作できないのを見て、工場の指導者や労働者はその学生と話しあい、次のようにねんごろにさとしたという。「事故は悪いことです。しかしそれから教訓を引きだし、正しく改めれば、いいことに変わります。煉鋼に不良品ができれば、もう一度炉にもどすまでです。人間を育成する問題は、党が修正主義に変わり、国家が変色することと直接関係します。あなた方は事故をしでかすからといって、大胆に実践しないのはいけない」と。

最後の問題は、ある専攻科は多くの現場と連携して重点がなく、またある専攻科は重点とする連携単位はあるが、次点の単位がないということである。実践の結果、この両方とも教育革命の要求には不応であることが判明した、という。重点単位だけがあって次点単位がないのは、生産品の単一性と教学要求の多様性との矛盾を解決できない。これにたいして、重点単位がなく、次点単位のみ多いのは、教育革命の実践を深くすることができないし、技術革新

も展開しにくい。そこでこの矛盾を解決するために、各専攻科は一つの工場を重点的な連携単位として選び、同時に  
教学の必要によって若干数の工場を選んで次点とし、短期の協同作業をおこなう、主点ではやや長い時間をかけて、  
典型生産品の生産と系統的な理論学習とを結びつけ、技術革新を展開し、教材を編集し、兼職教師を招聘し、理論指  
導をすすめながら、再実践する。次点単位では参観、現場での教学、調査研究、教材の編集などをおこなう、とする。  
以上が武漢大学のレポートのあらましであるが、教育を生産労働と結びつける、と一口でいっても、そこにはそう  
簡単にいかない事情がいろいろあることが判る。しかしそれを克服しなければ、アカデミズム、エリート意識をぬぐ  
い去ることができないこと、人間無視の科学技術の知識を、人間尊重、人間の価値実現へのそれに転回することは不  
可能であることを、大学人たちが深く認識していることもよく察せられるであろう。

次に、武漢大学の場合の最後にあげられていたことと関連するのであるが、実践との結びつきを重視することと、  
基礎学力をつけることとの関係をどのように考え対応しているかを、北京大学の場合によってみていきたいと思う  
(二九七二・七・二〇)。文化大革命前、北京大学の理科系は六年制であり、そのうち四年間が基礎課程であった。その  
科目の設置や教学内容は、いわゆる「広博な基礎」、「完整な体系」を盲目的に追求し、煩瑣乱雑であり、理論は實際  
から離れ学生の負担は重かった。そこで文化大革命をへて、この状況を改革するためいろいろのことがこころみられ  
た。ところが理論と実際との関係を強めるという方向の中で、以前の反動もあって、基礎課程は実際から脱離してい  
る、専攻課程に入ってはじめて実際と連係すると考える人がいた。基礎課程は学ばなくてもよい、とか、ちょっと学  
んで急いで専攻科に進んだ方がよい、「基礎課程は專業課程に奉仕すべきである」、ある専攻科は基礎課程と專業課程  
とを一緒にして新しい課程をつくる、ある基礎課程は專業課程のなかにとりこんでしまふ、などの意見が提出された。

その結果、「何かにぶつかれば、何かを講じ、何かが無ければ何かを補い、必要とするものがでてくると教える」という現象があらわれた。基礎課程の学習はバラバラであり、あっちに飛びこちらにもどり、専攻科の「はらのたし」にはさっぱりならないで、結局基礎課程はおしこめられ、その「階段」はなかなかかわしく、学習は受動的になり、はやくしようにも、深くやろうにもできないということになった。

このようなやり方は、実際的には基礎課程の改革を回避することであり、労農兵学員の培養に不利になった、という。そこで北京大学の多くの専攻科では単独に基礎課程を用意し、労農兵学員の実際の場合にもとづいて、その水準より出発して、系統的な教学を進めよい効果をあげた。こうして労農兵学員が問題を分析し解決する能力を養うには、基礎をしっかりと打ちたてるべきこと、専攻科の育成目標の必要にねざして、専攻科が必要とする基本理論、基本知識、基本技能を学員がよく学ぶように援助し、理論分析、数学の運用、科学実験などの能力を学員が身につけるように注意すべきことを確認した。そして三年間の年限のうち少なくとも一年半は基礎課程とする。そして一般的に次のことに気をつける、という。すなわち、いかに基礎課程が重要であるといっても、ある人がいったように、「大学では基礎課程さえちゃんと学んでおけばそれでよい」といった学と用を分離し、実際問題を解決できない学生を育成しないこと、教学過程で生動な比喩をもちいて基本概念を学員が理解するのを助けるのは有益であるが、比喩は厳密な科学定義の代りにはならないので、科学定義をきちんと掌握できるように援助しなければならないこと、旧い基礎課程が実際から脱離し理論体系の完整性を一面的に追求したのは改めねばならないが、必要な理論推導をおろそかにして、学員が論理推理の能力を身につけることができないのではいけないこと、最後に、基礎課程をよく教えるには要求を厳格にし、訓練をきつくしなければならぬこと。ある教員は厳格な要求と、「管理、規制、圧迫」とのさかい



めがはっきりしないで、当然とりかわすべき作業や実験報告や、当然掌握すべき基礎訓練にたいして、要求をきびしくしない。これは労農兵学員の育成にかえて不利になる。

基礎課程の教学は、専攻科との関係、生産の実際との結合に注意し、工場と連携し校内の工場基地を利用する。そして専攻科の基礎課程としては、その科の典型製品の生産と結びつけて教学を進行するのであり、理論を実際と連係する有効な道である、という。もっともこれは典型生産品をもって教学にかえるのではなく、典型製品の生産と教室の教学、実験教学とを結びつけ、典型性と一般性、针对性（焦点性）と系統性との関係をうまくとりあわせて、基礎課程の系統的教學をおこなうということである。ある専攻科の基礎課程では、学科の基本内容にもとづいて、浅きより深くへ至る系統的な教材と、そして典型製品と結びつけて教学を進める補充教材の二つを編集している。二つの教材を互いに配合して、典型を深く研究すれば一方面から他方面への類推ができ、そして一般的な規律をマスターするという目的を達することができる。もちろん典型製品によっては、その関係しおよぶ内容は綜合性を帯びているので、理解難度も高く、一定の基礎教學の準備があるものもある。それゆえ、典型製品の選択は適切であるべきで、難かすぎたり、偏よつたものは教学上このましくない。それから、このように典型製品と結びつけて教学をおこなうに、数学や物理の基礎課程については、区別をしないで一律に要求することはできないので、いろいろな形式をとって実際と連係させることが考えられている。

ここで、教学方法の改革の實際に少し触れておきたい。北京医学院の薬学系にも第一回の労農兵学員が入学してきた。彼らの一〇〇分の七〇は「はだしの医者」で、一定の医療実践の経験をもっていたが、文化程度はかなりまちまちであった。そこで次のような教学方法がとられた（一九七二・八・一八）。まず講義録をわたし、学生に自習をし問題

をもつことを要求したが、少なくとも学生はそれを読んでも理解できず、重点をしっかりと掴むことができなかった。そこで予習要領をプリントして問題を考えるように啓発し、同時に、学生たちと一緒に予習をして、道案内をした。そして教員たちは予習を助けるなかで、学生の問題があるところを普遍的に了解し、授業のときには不分明の所に焦点をあわせ、重点的に解説し、考えの筋道を啓発し、理解能力を増強することができた。このほか、学習が比較的困難な学生の復習をしっかりするために、重点的な練習問題を出し、教室で学んだ理論が運用でき、反復練習をおこなうように援助して、顕著な効果を取得したという。

次に、教員は単に文化知識を伝授するのではなく、唯物弁証法的な教育を行なうという教授法の改革への努力がなされている。例えば、有機化合物の性質を講義しているとき、すじみちが多くて学生たちが覚えるのに苦労しているのを見て、「比較があつてはじめて鑑別あり」の思想にもとづき、比較法を誘導した。また、矛盾の双方はお互いに連係しあつていて、お互いに転化する原理にそつて、学生が孤立して一面的に化学反応をおぼえないで、前後の関係を対比して理解するように指導した。そしてあるブルジョア階級の「権威者」が反応条件の一つの不変なものとする形而上学的観点を批判し、労働者同志が唯物弁証法を運用して、重窒素化学反応を分析し、大と小動と静という二つの矛盾を正しく処理して、生産過程を革新し、繁重な肉体労働から脱けだした事迹を紹介して、思考方法の重要性を強調したりした、という。

最後に、労農兵学員の文化程度がふざろいであるのが、教学工作の新しい問題であるが、教師はその補習に力を入れるとともに、学生どうしの教えあい、学びあいを組織し、学習方法の交流をおこなつて、自学能力を育成する面で、小さくないはたらきを示した。例えば、ある学生のグループは文化程度がふざろいであつたが、二、三の学生が先頭

にたつてはかの学生を引っぱり、授業の前に予習をし、問題があると討論しあい、解決できないとそれをもって教室にいき、注意してその箇所を聞くようにした。授業のあと講義内容について参考書を読み、重要な点をノートし、練習問題をする事によって自分の学習効果を検査する、という。

文科系の大学の教学改革はどのようになされているか、その一端を一、二の例によって窺おう。文科については毛沢東の「文科は全体社会を自己の工場とする」という指示、すなわち、社会という大教室のなかでいかに社会主義の文化課を樹立するか、という点に努力が向けられている。まず、山東大学中文系の場合をみてみよう（一九七二・八・二六）。ここでは去年の下半期に教師生徒がいくつかのグループに分れて、工場と農村に行き教育革命の実践を進め、今年も三カ月にわたって続行している、という。はじめ、社会という大教室で社会主義文化課がよく学べるかどうかについて、はっきり認識していない人もあったので、思想を統一して意識を高くするため、以下の措置がとられた。

(一)、毛主席の「学業を主とし、あわせて別のものを学ぶ」と「政治と業務との関係は、二つの対立するものの統一である」などの指示を、現実の階級闘争と結びつけて学習し、とくに政治（ものの考え方、見方、人との接し方、人間関係なども含む）と業務との関係では、従来から激しい路線闘争が存在していたことを認識し、そして文化課をしっかりとつかまなければ、労働兵學員が大学に進学してきても、必要な文化知識が学べず、実質上かって修正主義路線が大学の門を閉ざした事となんら変りがない、ことを確認した。(二)、教師学生が社会実践に計画的に参加するように組織し、労働者農民大衆に学び、労働者農民と結合する道を歩み、社会の大教室で社会主義文化課を学ぶ確信と決心を固めるようにした。そして師生は労働者農民大衆が毛主席の革命路線にそって闘う革命精神を目的あたりにし、彼らの自分たちにたいするおもいやりと希望を肌で感じて、教育革命への自信を強め、かならず文化課をよく学び党と

人民の委託にそむかないことを表示するに至った。(三)、古い文科教学は学と用とがはなれ、理論と実際とがバラバラであるという根本的な弱点があったことを討論を通じて明確にした。以上の基本的な作業をしたうえで、生産現場での教学活動が行なわれた。それには四つの例が紹介されている。

(一)、ある教学班の毛沢東文芸思想課では、「延安の文芸座談会における講話」を章を逐い節をたどって計画的に学習し説きあかし、現実の階級闘争に教学がよく適合するように、一冊の反動的な書物を選び解剖分析し批判をくわえた。このようにして、階級闘争、路線闘争は文芸のうえに必然的に反映し、革命的文芸は革命の政治に奉仕し、反革命の政治はやはり反革命文芸を要求し、これとぐるになることを認識した。これは教学を現実の階級闘争と結びつくと要約されている。

(二)、教学内容の必要にもとづき、教学基地の特性を利用して、社会調査を目的に組織し教学内容を大いに豊かにした。例えば、「すべての文化、文学芸術は一定の階級に属し、一定の政治路線に属している」という基本原理を深く理解するために、綿紡工場に入った師生は夏衍の『包身工』を反面教材として選び解剖分析をおこなった。そして一人の老労働者に調査をすすめたとき、日本の紡績工場で長い間包身工（人身奴隷的な労働者）であったその労働者は憤激して語った。「私は一四歳のときから紡績工場にいった。家には喰べるものはなく、妹たちは一片のナッパを分っていた。われわれ労働者は今まで団結して資本家と闘い、帝国主義国民党と闘ってきた。夏衍はわれわれを汚蔑し敵の作戦のままになる骨なしであり、帝国主義が中国人民を欺き侮蔑するために世論を造りあげることには心がけたのである」と。このようにして学生たちは大量の活きた材料を手にして、労働者大衆と一緒に理論と実際の両方面より『包身工』に深くほりさげた批判をおこない、それが王明の敗北主義路線に奉仕し、帝国主義の侵略、中国人民

を奴役するための反動本質を読みとった。これは学習と社会調査を結合することといわれる。

(三) 学生たちが先進人物の報道文を書くための調査研究の段階で、毛主席の調査研究に関する教えを講じ、そして実際に起草する過程で、階級闘争と二つの道の闘争において、実例と結びつけながらいかにして典型を識別し、主題を精選し、先進人物の精神境界を表現し、先進人物と大衆との関係を正しくつかむか、などの問題を講じた。教学を重ねるにしたがい、学生たちの実践経験は理性認識にまでたかまり、それがまた彼らの実践活動を指導するということになった。濟寧工場に入った学生たちは市革命委員会の統一組織的な報道任務を与えられ、市革命委員会宣伝部の人たちと一緒にいっていくつかの典型単位に行って取材活動をすすめた。あるグループの一二人の学生はニュース通信と調査報告一〇篇を書きあげたところ、すべて市革命委員会の宣伝部に採用され、五篇は省の放送局にとりあげられた。これらは学と用とを結合することといわれる。

(四) 下郷以後、中文専攻の各課程はお互いに密接に内的連係をもっていて、ある段階では一つの課程を主として、三大革命実践と緊密に結びつけ、その他の課程は主テーマを達成するための伏線あるいは背景として適当に配されて一本の縄をなうようにすることが大切であることを認識した。山東大学の中文系は下郷するとき、中国共産党史、毛沢東文芸思想、毛主席詩詞、作文の四つの課程をもっていたのであるが、例えば農村に入った師生はある時期、作文課程を主として、村史、家史を書く任務を完成したが、この時党史課は社会主義時期の二つの道の闘争史を講じ、毛主席詩詞課は社会主義時期の詩篇を講授し、みんなの路線闘争の観点を高め、二つの道の闘争から村史の重大事件を分析し、思想的基礎をうちたてる、というしだいである。これは実践の基礎の上に各課程を有機的に結合する、とされる。

いま一つ、南開大学政治経済系の新教材づくりの経緯をみることにしたい（一九七二・八・二二）。この大学は去年の春以来、六つの教育革命実践隊をそれぞれ工場、農村、商店そして某経済指導部門に派遣し、いくつかの基礎理論課と専門理論課の教材を作成することができた。この際、次のような方法をとった、という。

(一)、代表的な性格をもっている工業、農業、商業の各地点を選んで教学基地とし、教師が社会の実際に接触し、労働者の再教育を受け、業務上の再学習をおこない、新教材を編集する場所にした。例えば、政治経済学の資本主義の部分の教材を書くために、天津の第三毛糸紡績工場、もとの東亜毛糸紡績工場にいぎ、蹲点調査を進めた。この工場の大量の資料をよみ、老労働者や幹部と話しあい、そして解放前のこの工場の搾取情況と資本の蓄積の過程を分析計算をこころみた。この工場は一九三四年から一九三七年にいたる平均剰余価値率は一〇〇分の四六六、一九三八年から一九四一年のそれは一〇〇分の九二九であった。資本家がこの工場を開いたときの資本金は二三万元、六年ののちには三二万元になっていた。労働者は毎日一一時間働き、その上夜間作業にかりだされ、それでも腹一杯喰べられなかった。資本の蓄積がすすむ一方、労働者は日まじに貧困化していたのである。これらの材料を教材に編集して、師生が基本理論の理解を深めるのに役立たせた。

(二)、典型材料の局限性を克服するために、点より面に到る点面結合の方法をとり、大量の調査をおこなった。資本主義の搾取の実体に関しては、上記のほか、解放前の天津三条石の各工場の搾取情況を調べた。労働者は一年に三五七日間働き、一日一六から二〇時間労働をし、現在の労働者とくらべてそれは二・五九倍になる。これらの材料を用いて、「旧中国の資本主義の搾取の特徴」を編集したが、この教材は「搾取有効論」の反動的な本質を暴露し、師生をしていきいきとした路線教育を受けさせるものである。

(三) できるかぎり現実の闘争に参加し、具体的な形で工場、農村、業務部門の一定の工作に参加した。例えば、生産品の質量の問題は、過去においては技術問題と見なして、政治経済学の範疇にはいられていなかった。しかし調査をへて生産品の質量が低いのは、反革命修正主義路線が企業の管理を破壊して現出させたものであり、この問題は路線問題であることが認識できた。編集した教材に現実の路線闘争を反映させることができた。

(四) 石油化学工業の状況を調査し、国家の統一経済計画の重要性を認識し、教師をして書物のわくを跳びださせ、教材内容を豊富にした。

(五) 工場、農村において調査をし編集した教材や資料を、再び労働大衆と関係部門に送って意見を求め、修正をおこなった。ある教材は工場の同意をえて、まず工場で講義し、これの反響と人びとの意見にもとづいて、もう一度修正をほどこした。社会主義工業グループは編集した教材を、天津動力機工場の幹部に講義し、短期訓練班を行なった。同時に、はつきりしない問題を提出して、彼らに講義してくれるように依頼した。教材の源は実践の検査をへて教材をして三大革命の実際に符合させることができる。以上要するに、社会を工場として教材を編集すれば、豊富な源泉をもっているということである。

また次のような体験をした、という。一つは、社会を工場として教材を編集することは思想革命である、ということである。はじめは「怕」(おそれる)、「難」(むづかしい)、「等」(……するのを待つ)という思想が頭にあり、待っていれば大学は再開されるであろうし、そうすれば教師は門を閉ざして教材をつくれればいいと思っていた。やがて、教育革命実践隊を派遣してその方向を正した。しかし学校の門をでたあとも闘争は容易には実を結ばなかった。「閉門編集」を批判すると、「なすことをもって学習に代える」思想が出現したのである。そして教材改革は路線をしつ

かりつかみ、政治によって業務、理論を統帥して実際と結びつけた新教材をつくりあげねばならないことを、逐次認識したのである。二つには、社会を工場として教材を編集するには、必ず真剣に書物を読まなければならないことである。工場、農村に入った最初のころ、現実の闘争に参加し政治経済学の実際問題に多くであったが、理論的に説明できないことが往々にしてあった。大量の感性材料に接しながら、理論と路線闘争の高度な分析を進めるに到らず、教材を編集し現実闘争のために役立てるにはいざさか力不足を覚えたのである。その根本原因はマルクス、レーニンおよび毛主席の書物をまじめに読まず、革命理論の武器を欠いていることである。教材をよく編集するには、まったく実践によらなければならないが、同時にしっかりと書物を読まなければうまくいかない。もちろん過去のあのような門を閉ざして読書してもだめである。かならず三大革命実践と密接に結合して、まじめに刻苦して読み、四通八達しなければならぬのである。三つめには、社会を工場とすることは、教師が政治上で再教育を受け、業務上で再学習をすすめる教室に社会はなる、ということである。政治経済系の新教材を編集するにあたって南開大学の教師たちがとった方法は大体以上のごとくである。教師の思想改革が大きな問題としてそこに浮びあがっているのがわかる。われわれは次に、そして最後の問題として、教師の思想改造についてみてみよう。

「教育改革の問題で主要なものは、教員の問題である」という毛沢東の言葉にあるように、長い間さまざまな特権を身につけていた教師の思想、あるいはそこからくるものの方、考え方、捉え方はそう容易には変革されるものではないであろう。その苦心のあとを二、三の例によってみることにしよう。一つは、北京大学中文系教授の林庚の場合である（一九七二・七・二〇）。彼は劉茂清という人の英雄的な事跡を調査し、レポートしたときのことを語っている。劉茂清については新聞などによってすでに知っていて学習していたが、調査にいく前には次のように考えていた。



同志はたしかによい幹部であり、自分たちが学ぶ値打のある人である。しかしこういう人物を描く報道文はきつと「もちあげる」ところがあり、一人の同志を表揚し、教育宣伝のはたらきをよくもたせるために、おさえてかくことはなく、調子をあげてかく、これは完全に「論理にあっている」、と。このような観点をもって農村にいき訪問調査をおこなったところ、事實は彼の主観的憶測とまったく逆であり、貧下中農の人びとは報道のなかにはなかった多くのいきいきとした事跡を話してくれて、彼らを深く感動させた、という。調査をへて、伝えられたあの報道は高く書きすぎているばかりでなく、まだ書き方が不充分である、という結論になったという。そして林庚はいう、「私の下郷以前のあの誤った観点は事實の前ではまったくもろいものであった。自己否定は知識分子にとっては容易なことではない。私のような知識分子は頭の中に一つの唯心主義の独立王国が存在していて、心のままに、欲するところに一連の理論がでてきて、私のために弁護してくれる。しかし、実践の前では、真理と誤謬は鮮明に区別される。貧下中農の劉茂清にたいする深く厚いプロレタリア階級の感情と対比すれば、自分の誤った観点はブルジョア階級の世界観と緊密に関係していることが深く感じられる。ブルジョア階級の世界観をもっては、プロレタリア階級の英雄の本質を充分に理解することは不可能である。だから、プロレタリア階級の英雄人物にたいして半信半疑になってしまうのである」、と。

林庚は、もともと、指導上とられている路線が正しいか誤っているかは、自分が大衆の一人になってしまつては弁別のしようがない、と考へていた。立場とか世界観とかがないことが、誤った路線をとる原因である、と思つていたが、劉茂清の英雄的な事跡は、またこの彼の論理を否定した、という。劉茂清が反革命修正主義路線に惑わされず、断固として革命精神をもち、また毛主席が自ら親しく発動した文化大革命をあのようによく理解できたのは、なぜか。

その根本原因は、「劉茂清が毛主席にたいする深厚なプロレタリア階級の感情をもっており、党と社会主義にたいして無比の熱愛をいだいており、高い階級闘争と路線闘争の覚悟意識をもっていた」からである、という。つまり、客観的妥当な論理と考えていたのが、階級観点より分析すれば、各階級は各自の論理を有し、おのおのの立場、世界観、思想体系をもっていて、自分のはその一つにすぎず、自分の安心立命の場所に行っているにすぎない、というのである。

次に、山東大学中文系教授高蘭は、下郷した際、担任した作文課についての経験を語っている（一九七二・五・二六）。彼は学生と一緒に家史をさがし、家史を書き、家史を修正する仕事をしたのであるが、それは彼の何十年にわたる教学生活中はじめてのことであり、教室をとりかえ、環境が変わり、教学方式を新にすることなど、すべてなじみのないものであったが、学生たちとともに学習し、調査するうちに、だんだん新しい知識を学んでいった、という。例えば、過去の作文課は教師が随意に題をだし、学生に部屋のなかででっちあげさせて、教師が批評修正をする。それも語句の使い方を訂正するだけであった。今度次のようなことがあった。家史をさがし、家史を書く工作において、高蘭は学生と一緒に一人の模範飼養員を訪問し、そのあとで学生たちはその飼養員の家史を書きあげて彼に修正してくれるように渡したので、彼は過去の習慣どなりに、その文章について句を逐い段を逐って細心に修正を加えた。ところが討論をへて、その飼養員の英雄的な形象が樹立されていない、意に満たないということで、第二回目の訪問となり、二回目の修正をしたが結果はやはり充分に満足できないものであった。これはどういうわけなのか。このとき彼らは毛主席の著作を学習し、「満腔の熱意がなく、目を下に向ける決心がなく、求知の渴望がなく、偉そぶるくせをすてて、甘んじて小学生になる精神がなければ、かならず何もできないし、またうまくやれない」という言葉に教えられて、その原因が世界観にあることを知った、という。ここで工作を検査し、態度を正して三回目の訪問を行ない、ついに

比較的満足できる作品にすることができた。このことは、「私の思想上に深刻な教育を受けしめ、業務上にも非常によい学習になった」と高蘭は語っている。

さらにもう一つ、今度は数学者の例をみてみよう。北京大学教授冷生明の思想改造、教授改革の体験報告である（一九七二・七・二〇）。労農兵の學員が三大革命の第一線より大学に入ってきたとき、彼は次のように思っていた。「彼らの路線闘争の意識の高さに比べて、自分は長い間修正主義路線の悪い影響を深く受けているので、教学のなかでおそらくその反映がありそれを暴露するであろう。それでよく教えるのは困難であるが、やってはいけるだろう、失敗は免れがたいが、少なくすることはできるだろう」と。ここに、まったく新しい型の学生を迎えて一抹の不安と途惑いの様子がよくかがわれるが、その結果自然に受身の体勢になり、講義をしても重点をはっきりさせなかったの、学生たちはどうも聞いていても理解できない点があるようであった。はじめこれは教案の準備が不完全であるから、と思ひ、でてくるであろう問題や、講解できる道筋などすべてあらかじめ予想し、話す順番をきめて講義にのぞんだ。最初のがだめであると、二番目のを、それでもうまく教えられないと、第三番目のをもってくる、というわけである。その結果、あるときはうまくいき、あるときはつまづいた。その主な原因はやはり教案をきちんと立てないからだと考えていたが、このような考えに痛棒をくらわしたのは「対教」の講義のときであった、という。

そのとき、幾通りもの教え方を準備し、うまくやれると思っていた。ところがいざ講義をはじめると、学生から問題が続出して、やむなく講義を中止して、みんなの意見を求めるといったことになった。そこであるクラスの討論に参加したときも、数学の推理はいくつかの段階があり、一つ一つ講解し、一つ一つ通過すればわからないはずはない、と思っていた。ところが学生たちは、「あなたが論証する前の段階は理解できるが、そのつぎの段階が接受できない

のです」という。「これは形式論理の厳密な推論であって、どうして前の段階が理解できて、後の一段が接受できないのか」。こんなことを聞くのは三〇年の教師生活ではじめてだ、と思っていたが、真剣な討論と細かい分析をへて、「私のいう二つの段階は、形式論理上の意義は全く同じである。しかし主要な矛盾の二つの面は互いに転化する。この思想上の闘いがきわめて深く私を教育した」という。そして教員は必ず自覚的に世界観を改造し、プロレタリア階級の思想で書物を教え、人を教育しなければならないことを、実践を通じて体得した、という。そして学生にたいしては、「当然高い標準をおき、きびしく要求し、大胆に管理し、互いに助けあうべきである」、といった強い姿勢がもてるようになる。自分の教育方針に自信があつてこそそのことである。例えば、ある学生は練習問題や考査をしているとき、誤ったところをはっきり検査せずに消しゴムで消したりするが、誤りを発見してもかろく消し去っては、間違いはどの点にあるか了解できないし、その原因も発見できないことを指摘したり、また、学生の思想上、身体上のことにも心をくばり、学生の困難とする点を身をもって知り、必要とするところを理解することに注意する。と同時に、教学についての彼らの意見をつねに求め、世界観の改造を援助してくれるように頼む、ということもできるようになる。「先生はわれわれ教育革命戦線の同志です。われわれの目標は一致しています。どうか大胆におやり下さい」と学生たちからいわれるまでになり、このようにして、学生たちの熱情あふれる助力のもとに、労農兵に奉仕する過程のなかで、彼の思想は着実に変化をおこしはじめた、という。

(3)

文化大革命以後の中国の教育改革の実情をトピック的にとりあげてきた。次に残る問題はそれが教育学的にどのよ

うな意味をもっているかということである。ここでそのことについてごく大まかな素描をしてみたい。その前に一度中国の教育改革の性質、方向といったものを、清華大学革命委員会の文章（「紅旗」一九七二年、第九期）を借りてまとめておこう。

(一) 教育革命の実践において、理論が実際と遊離する唯心論的先験論を批判し、教学、科学研究、生産の三結合を實行し、典型製品の生産および科研任務を選択的に結びつけて教学をすすめたこと。また、実際から遊離したり、理論を軽視するという両種の一面性を克服して、理論と實際を統一することを促進しなければならないこと。このことと関係して、学生が実践の基礎の上に基本理論をよく学び、理論を用いて實際問題を解決することができるように、科学実験を重視する。このほか、現場の授業、生産と結びつけた設計作業、形象化した教学なども、理論を實際と連係して教学をすすめる有効な形式である。理論課程のある教学内容はときとして、選定された生産、科研任務などと連係することができないことがあるが、もし多種多様の形式をとって實際と連係させて教学をすすめるならば、また實際から離れ、「空対空」に理論を講じる現象が生れやすい。これは避けなければならない。

(二) 教材について、注入式の教授法を廃止して、学生がおもに自分で問題を研究するようにするには、必ず自学に適合する教材があらねばならない。清華大学が編集した教材は改革がまだ充分でなく、少数の教材が自学に比較的適宜である、という。例えば、電子学の教材は、実践の指導が比較的よくできている、というのは編者が自分の「三脱離」の弱点を正視しているからである。その教材中の典型電路と例題は、二分の一以上が編者が身を以て実践したものであり、四分の一は社会調査を行なって得たものである。四分の一たらずがその他の資料より引かれたものである。このような基礎の上に、また集団の総括討論をへて、はじめて電路の工作原理を深入浅出的に分析できるのである。

この教材が自学に比較的適合しているのは、彼らは何回も学生を教材の審評に参加するように呼びかけ、教学実践の経験をまじめに総結したからである。毎章のはじめに内容提要が書かれ、学習の任務、重点、方法が提出してあり、重要な章節のあとには、小結を書いて、各部分の内容の相互連係を指示している。このほか、実際と連係し、啓発的な思考題、作業題、実験提綱がのせられている。

以上は理科系の場合であるが、教育改革の基本的な考え方、問題はよくできていると思う。これらのことから、まずいえることは、真に唯物論的認識論にのっとった教育を実現しようとしている、という点である。陸定一一派が「労働即学習」といって、学生を単なる労働力として使用し、学生が革命運動の実践でえた感性的認識を理性的認識にまで高める必要を否定し、理論の実践にたいする指導の意義を否定した、と批判されること（「紅旗」一九七一年、二八八号）と正反対の方向である。

すなわち、人間の認識はけっして先天的なものではなく、実践が認識の源泉であるという事実から教育方法を考えみると、教師の仕事は学生がすでに身につけている一定量の経験と能力を基盤にして、それを学生自身が再編成することによって、より高次の段階に到達できるようにすることである。

ヴィゴツキーがその「発達の最近接領域説」によって示唆した教師の役割は、学生が何かの作業をしていて、問題にぶつかった場合、誘導的な質問、範例、教示あるいは別の認識の提示などによって、学生がもっている経験能力などに矛盾を起し、葛藤、緊張を生じさせることである。というのは、今までのものを再構成し、組織しなおすことによって、新しい認識は生みだされるからである。

これは、デュエーイの教育論をも思ひおこさせる。「教育とは、経験の意味をつつくわえ、次の経験の進路を方向づけ

る能力を増大させるところの、経験の改造ないし再組織である」。あるいは「各人を経験の再認識の主導者として行動せしめるような、そういう性質の経験の連続的改造ないし再組織である」。

上のことと直接に関連してこころみられているのが「典型学習」である。それは「先進典型に学ぶ」とか、「典型製品を作りだしたり、学んだりすることと系統的な理論学習とを結びつける」とか、「典型製品と結びつけて教学を進め、技術革新を展開し、教材を編集し、兼職教師を招聘し、理論の指導のもとに再実践する」といわれるものである。

「すべて普遍性を備えていると同時に、特殊性をも備えている。普遍性は特殊性の中に宿っている」とされる典型は、理念上の産物ではなく、現実存在しているものであり、それを構成しているいろいろのファクターは生きてその機能をはたらかし、ある構造を形成している。

対象を単純な要素に分解して、もとの対象をその要素から再組織する手続きを通して、その対象を理解するのではなく、典型学習は生きた全体をそのままに、生きて作用している要素をそのままに観察し理解することの大切さを重視することからきている。そこではいわば直観、行動的直観あるいは類推による理解が不可欠のものとして要請される。経験を豊富につんだ労働者、農民、兵士が大学の教壇にたつ、労働者出身の教師を登場させたのも、これと密接に関係している。きわめて、具体的にプラグマテックな教学方法といえる。それだけに一層理論の重視もいわれるわけである。

そしてさらには、新しい典型を、自己の任務や周囲の条件に応じてつくり出すことが目指されているのはいうまでもないことである。この典型学習は系統学習と問題解決学習の統合であると位置づけられるものと思われる。